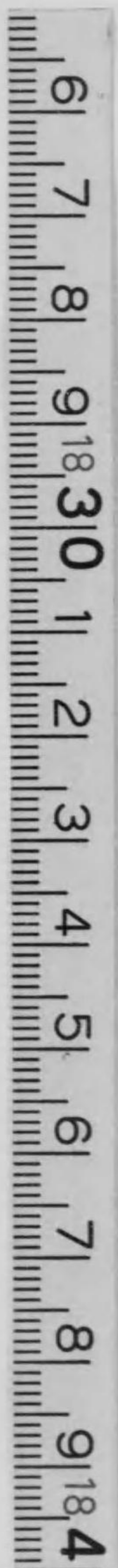


272

61



始



吉田惟孝著

英國小學校の
教室學習の
教員勤務の
實狀

大正

13. 6. 6

内交

東京 厚生閣刊

言 序

法令や政府の調査物や教育家の學説から纏めた机上の產物ではない。實地に足を學校や教室に踏み入れて、見聞した實況録である。英國の一小學校の教育的活動を寫したフィルムである。抽象のうちに具體を觀るは困難であるが、具體のうちに抽象を掴むは容易である。此の意味に於て本書は最も平易な生きた英國小學校教育の具體的案内書である。

272-61

目次
前篇 教室覗き

一	修身作法	一
二	教室の繪畫	三
三	文學俱樂部の創設	三
四	學級討論會	三〇
五	學校劇の學習	四〇
六	短詩の學習	五一
七	少年文學ロビンソン・クルソー	六一
八	讀書の指導	七一
九	文法の時間	八二
十	裁判の演習	九一

本書は編述者が彼の地で見たたり聞いたり讀んだりしたものを基にして書き集めたものである。書き集めたと言つても断片記事ではない。纏まつた學校參觀記録である。歸朝後幾度も朱筆を入れたり書き添へたりした。そして何度も編述者の頭腦を通して讀み易く、解り易くするやうに努めたものである。

大正十三年一月 御成婚を祝ひつゝ、熊本銀杏城下にて識す

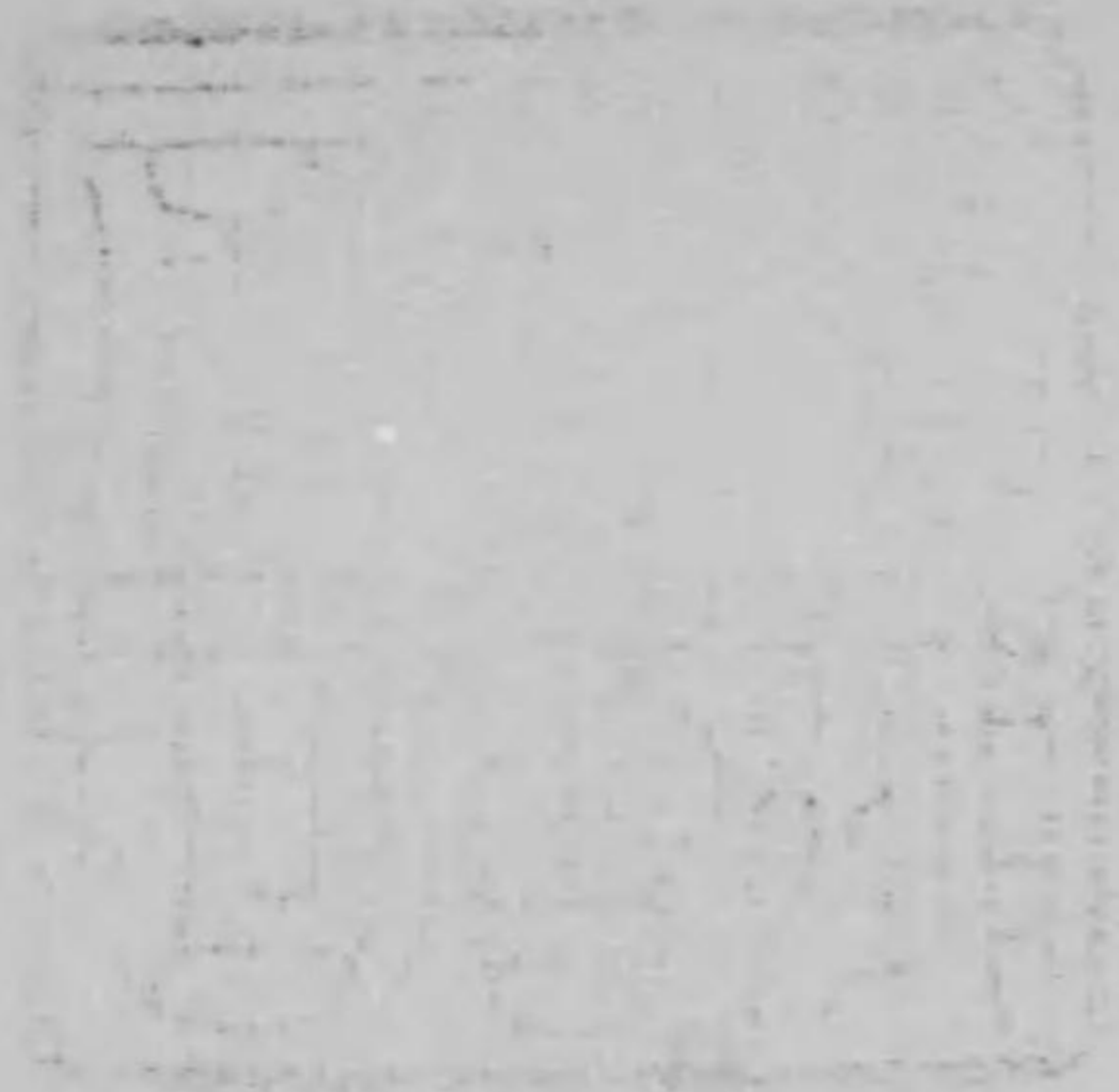
後篇 學校視き

一 校 長 拜 命	104
二 學校を見た第一印象	107
三 職を賭しての請求	113
四 汗水たらしめて校舎修理	111
五 寛嚴の兼ねた取扱ひ	117
六 改革と危禍	120
七 視學のさまざま	123
八 父母の學校理解の始め	126
九 幼稚部の改革と教師の鏈れ	128
十 所謂新しい若い先生	126

英國小學校の 教室學習の 實狀

教員勤務

前篇 教室視き



一 修身作法

「此の頃の學生の行儀作法つたら、あれ一體何です。頓となつてゐないぢやありませんか」とは、屢々聞かされる言葉である。一體、道徳といふものは、人を善に導き、惡を避けしめるためのものであるが、此の頃は、生徒といはず、學生といはず、自分の我が儘を通す理窟に、道徳を悪用する傾きがある。誠に困つたものである。

眞に自分の職を楽しみ、自分の生徒を愛する先生は、生徒が入學試験に合格する数の多いことよりも、卒業してから容易く仕事にありつくことよりも、心掛のよい行儀の正しい生徒となり、天賦の良質を遺憾なく發揮して、やがては眞の紳士、誠の淑女となることを熱望してゐるに相違ない。然るに事實は其の反對を示して居るとは、何といふ悲惨な撞着であらう。

修身作法

大抵の學校では、金曜日の最後の時間割に、MMと記入してある。之れは、修身作法 *Morals and Manners* の略字である。此の時間に教師は、過ぎた一週間の學校生活に於ける、生徒の修身作法につ

いて、反省措意を興へる唯一の時間にしてゐる。又此の時間には、お互に意見を發表し、批評しあふこともあるから、思想を確實にし、辯舌を練磨する機会にもなる。次に、修身作法の時間が、どのやうに過されてゐるかを知らるために、教室を覗いて見よう。

先生は、熱心に話をして居る。生徒達は、靜肅に、眞面目に、聽いて居る。併し中には、困つたやうな顔をして居る者も、全くないでもない。

「……………此のやうなことは、皆さんか、喜んで讀み耽る、拾錢雜誌の學校笑話中に、出て居ることであるが」と、先生は語り出して、一寸、言葉を切り、今一度、生徒の顔を見つめる。

『あれは、讀者を面白がらせるために、作つたお話で、實際に其の通り行つてはならないことです。私共は合同生活を圓滿にしていくには、お互に不快な思ひをしたり、都合のわるい目にあはせないやうに、注意しあつてゆかねばならぬ。學校も學級も、一つの合同生活であるから此の點に於ては、少しも變りはない。皆さんは知つてゐるでせう、此の級に起つたあのこと

を、皆さんの中には、誰がしたかを知つてゐる方もあるでせう。一寸言葉をと切つて、

『チラーの机を顛倒りかへした者は、誰ですか、手を挙げなさい』。死のやうな沈黙。先生は、更に言葉を續けて、

『私は、皆さんの教師として、ここに來て居るのです。皆さんを教へ導く、皆さんの手助けをする教師として來て居るのです。そして、私は、皆さんの教師であることを、心から満足し、感謝して居るのです。皆さんは、教師であることを、衷心の喜びとして居る私に、巡査になれ、檢事になれと希望せられるのですか。私は巡査や檢事の代りをするを好みませぬ。皆さんも私がそんな者になると、屹度、不愉快に感ぜられることとせう』と、一寸息をのみ込み、暫く黙つて居る。

『チラーの机を顛倒りかへした人を知つてゐる者は、手を挙げなさい』

生徒達は顔を見合せて、暫くは躊躇してゐたが、一人の生徒は、思ひ切つて手を挙げたので、之れに勵まされてか、大多數の生徒は手をあげる。

『誰でもよいから、云つてご覽』。

一番後ろに坐つて居る、丈の高い生徒は、スツクと立ちあがつて、

「先生、それはよくありません。友達の告口をすることになりますから、學生の名譽を傷けると思ひます」。

「皆さんは、それに賛成ですか」すべての生徒は舉手する。

先生は、學生の名譽の眞の意味を説明せねばならぬと考へる。英國の學生は、學生の名譽といふ言葉を、一般に事の何たるを問はず、友の悪事を言はないことのやうに考へて居る。机を顛倒りかへされて、書物や學用品をインクだらけにされたチラーでさへ、先生は、此の上に追求されないことを欲して、

「先生、あれは冗談ですから、私は何とも思ひませぬ」。

先生は又、冗談でないことを説明せねばならぬと考へる。そこで、先生は徐ろに説きはじめる。

「チラーは、書物を汚されて、損失と不自由を蒙られるし、學校も亦損害を受ける。汚された書物は、生徒の父母達が、納めた教育税金で買ったものである。此の税金で又新しい書物

を買つて取り換へねばならぬ。他に害を及ぼすものは、悪戯であつて冗談ではない。悪戯は罪惡の一種である。即ち學校團體に損害を及ぼすものは、冗談といふことは出来ない。それで公けのために、何うしても犯罪者を明かにするのは、私共團體員の義務である。皆さんは此の場合、何うしたらよいと思ひますか」。

「先生、した者は自首したらよからうと思ひます」と、一生がいへば、

「さうです」と、先生は大きくうなづき、

「併し、先からの有様を見ると、した者はどうも、骨のない人のやうに思はれてならぬ」と、嘆息する。

「先生、一人々々に、おききになつては如何ですか」。

「勿論、時にはさうせねばならぬ場合もありますが、私は皆さんに對して、逆もそんなことは出来ませぬ。一人々々に聞き直すことは、其の人はこんなことをしさうな人であると、疑はねば出来ないことです。私は罪もない人を、疑の目を以て見るやうな、そんな恐ろしいことは出来ませぬ。それで、若し本人が自白しませんでしたら、皆さんの中で、した者を知つてゐる方

は、言ふべきであると思ひませんか。フットボールの級將は、

「人の告口をするのは卑劣なことであると思ひます。學生は、決して騙蹴ウイニャックをしてはいけません。先生は言葉鋭く、

「騙蹴とは何のことですか、説明しなさい。此處は、フットボールの競技場ではありませんと、きめつける。級將はキマリ悪るさうに、

「騙蹴とは、何も悪戯で使つたのではありませぬ。いつも使ひつけてゐますので、其の何であります………」先生は、言葉靜かにそして強く、

「よいと知りながら、それを言ひきらぬ者は、自分の名譽を汚しても、眞實を語り得ない卑怯者ではありませんか。私は一人々々に問はないのも、一つは此の懸念があるので、問ふても無駄であるやうな氣がするからです。私は本人が自白するのを待つてゐたいのですが、本人が自白しないならば、知つて居る者が、言はねばならぬと思ひます」と、先生は話して、何ものかを待ち設けてゐるやうだが、何の反響もない。教室は再び沈黙に陥る。先生は言葉をついで、

「若し皆さんは、お金を盗んだ者を知つてゐたとしても、黙つてゐて言はないのがよいと思ひますか」

「先生、それと之れとは違ひます。お金を盗むのは罪惡でありますが、机を顛倒りかへすのは學生の冗談です」

「いや、冗談ではありません。冗談は、罪のないものです。人に何等の損害も不快も不便も與へぬものです。よしや與へたにしても、それは楽しい笑ひで、美しく消されて、其の場限りで無くなるものです。今度のは、チラーはインクを零され、學用品を汚されてゐます。若し當の本人が出て來ないときは、チラーは、學校から借つた書物を汚したことになるから、チラーの兩親は汚された書物代を辨償せねばなりません。之れでも冗談と思ひますか」級の中程にヒソ／＼話が起る。

「先生、級の者が、みんなでお金を出しあつて、損害を償つてはいけませんか」と、一生が述べる。

「なぜ、そんなことをする必要があるのでですか。皆さんが悪戯者を知つて居るが、それをい

ふと告口になるから、それでみんな罪をかぶらうとするのですか。言ふべきことをいはずに黙つて居るのは、悪戯を庇ふことになるから、矢張一つの罪を犯すことになります……………」

誰か鷓鴣と鶴の昔話を知つて居る者はありませぬか』

一人の女生徒は手をあける。話させられる。先生は話の終るのを待つて、

「鶴は、どれだけ申譯しても駄目です。鶴は悪者仲間にあつて居たことは事實です。それで、悪者同様に、罪を負はねばならないのです。皆さんは此の鶴のやうに、本日は悪者仲間にならうとしてゐるのです。併し、私は皆さんに、鶴と同じやうに、罪を負はせようとは考へてゐませぬ。私は悪戯者に、最後の機会を與へます。眞の男兒となるべき最後の機会を與へます。誰がしたのですか白状しさない』シーンとして居る。誰一人動く者もない。

「若し本人が自白しないときは、本人を名指し得る者は手をあけて下さい』四・五名は直に手をあけたので、他の生徒は戸迷ひしたやうに手をあける。

「よろしい。私は出来ることなら、皆さんに名指して貰ひたくない。本人に勇らしく自白して貰ひたいのです。さア、した人は立ちなさい』全生徒の目は、背後の隅に注がれる。瘠きすな

霜の狭い男の兒が、のろ／＼と立ちあがる。彼れは机の蓋につかまり、泣き出しさうな顔し乍ら、

「先生、私は冗談のつもりでしましたのです……………」。他の生徒は早くいへばよいものを、何をくづ／＼してゐたのだといつたやうな顔つきをして居る。

「外に出なさい、ブレーキさん」と、先生は嚴かに命令する。

「サテ、皆さん。ブレーキさんを何うしたらよいでせうか」と、先生は全級生徒の意見を求める。

色々な意見が出る。中には、ちと過酷ではないかと思はれるものもある。學生は卑怯者に對して憐みは持たぬと言ふものもある、結局、留置か、答か、二週間絶交か、損害賠償かのうち何れかをすればよいといふことになる。

教師は、戸口に坐つて居る女生徒に、ブレーキを呼ばしめにやる。そしてブレーキに、

「今までのことを詳しく手紙に書いて、お父さんにやるのです。お父さんは、あなたが汚損したものを、すべて辨償してくれるか何うかをききにやるのです。おつも残らず書きなさい。書

いてしまつたら、皆の前で讀んで見ますから。ブレイキは、答たれることを望んで居たが、許されないで、すごくと出ていつて、手紙を書きはじめる。

先生は、今一度、學生の名譽と告口について、誤つた考を指摘する。

「人に迷惑をかけ、社會に損害を及ぼすやうな行爲をなす者を庇ふことは、學生の名譽どころか、不名譽である。此のやうな社會のバチルスを明るみに出して、根絶に努めるのが、學生の名譽である。明るみに出すために、當事者に申告することは告口でなくて、學生の義務である。一個人の情實にかられて、社會の迷惑を傍視する態度は、なすべきことを盡さないものであるから、公私混同の罪を犯す者である。」先生は更に他の例をあけて話を進める。

「……數年前に一人の悪戯者は、インク瓶にカルシウム・カーバイトを入れたので、各生徒のインキ壺から、大きな黒灰色の泡がしきりに立つて机上に溢れ出る。生徒はクス／＼と笑つて居るけれども、先生は一向氣づかずに、書取用の紙を用意して、書取をしますから、特に氣をつけて奇麗に見事に書きなさい」と命じて、一節書き終ると検査を始める。全生徒は用紙を机上の泡で汚くし、墨色は鮮明を缺いて居るので、先生は數かに、放課後居残つて書き直しをす

べく命ずる。生徒は、「それはいけません。インクが此の通りに泡だらけで、逆も書けません」と言ふので、先生は「それなら、誰がこんな悪戯をしたか、皆さんで見つけ出しなさい」と命じ、全生徒は見つけ出すといふことを約束して、課外を延ばすことにした。

金曜日の午後の時間のMMは、大抵此のやうにして過される。此の時間には、先生はなるべく説教めいたことをせずに、生徒に思ふ存分話させ考へさせて、自ら發明し發見し納得するやうに導く。

編者曰く、西洋人は道理で動くことは邦人よりも大であるやうに思ふ。編者は巴里の女學校で修身を參觀したときも、特に其の感じを強くする。それで、西洋の修身訓話は、明晰な道徳的概念を與へることに重きを置くやうになるのも尤もと思ふ。西洋の修身は結局倫理哲學に歸

着するものであらう。斯の如く西洋の修身訓話の終局は倫理習得であるから、我が國のも然あらねばならぬと断定又は豫言するのではない。國民性の相違は、修身教育上大いに顯みなければならぬ。邦人のやうに、道理でも動くが又「道理はさうかも知れぬが腹の蟲が承知せぬ」といふやうな民族性の所有者を教育するに、却つて道理に重きを置けばよいのか、或は置かねばよいのか、大いに研究すべき問題である。

思ふに知識の程度の低い者ほど、知的情操を感ずること少いものである。我が國の小學校の修身書の例話のうちにある、兒童の生活と餘りにかけ離れた昔の道德的偉人の言行は、想像力の發達した大人ならば、觸感し難いものである。故に小學校の修身の副讀み物として、少年少女雜誌に載つて居るやうな、現代兒童の教訓物語を集めた種類のものが大切である。

二 教室の繪畫

新學年になつたので教室替がある。新に移つた教室を、級の個性のあらはれた特色のある愉快な場所にするには、どうしたらよからうかとは、私共の第一に考へる、そして楽しい問題である。

ある。級の者が幸福に熱心に學習する上に、教室の如何は少からぬ力を持つて居る。一步足を教室に踏み入れた瞬間の印象は、私共の學習を支配する力が大きい。明るくて生々した居心地のよい教室と、薄暗い濕つほい塵埃臭い教室は、私共の氣質には非常に異つた影響を與へるのである。

私共の移つて來た教室は、今まで卒業生の使つてゐたもので、教室と共に色々な品物の遺贈を受けたが、其の中に繪畫も少からずある。繪畫殊に壁間に掲げる繪畫は、頗る大切なもので級の趣味程度の沈黙の證明者であつて、又無言の教育者である。遺贈の繪畫は、種々雑多な寄せ集めもので、亂雑に配列してある。是非何んとかせねばならぬとは、總ての者が一樣に感じてる點である。國語の時間に、先生は、「次の話方の時間に、「私共の教室の繪畫」といふ題について、級の討論會を開きますから、なるべく意見をまとめて、ノートに書いて持つて來なさい」と、告げてあることを聞かされて、教室を覗く。

級の首將は話して居る。

「私はここに掛けてある繪に、好きなものは一つもありません。それ等はすべて疊よりした氣持を與へるものばかりです。私共の此の楽しい美しい教室には、もつと明るい繪畫を掲げた方がよいと思ひます。寫真が三枚ありますが、こんなものは壁に掲げるほどの價値はないと思ひます。私共は色刷りの繪畫を掲げたらよくはないかと思ひます。彼は競技の首將であつて、繪畫に對する彼の感じや意見を十分に發表するに、少からぬ困難を感じつつ話し終る。

ミュリエルは他の方面から遺贈の繪畫を批評する。

「額縁は一つく異つてゐて、不統一なやうな感じが致します。繪の掲げ場所も高低まちぐで、丁度子供の切貼帳のやうに思はれて可笑しくあります。額縁だけでも是非よいものを買ひたいと思ひます」と、彼の女はよどみなく述べる。

此の批評からして、繪畫と額縁と何れが大切であるかといふ議論が出たが、それは言ふまでもなく繪畫である、併し額縁も考へねばならぬものであるといふことに、異論を挾む者は一人もない。いつも居眠りして居て、時々警句を吐いて人を驚かすドーマーは、

「額縁は窓である。私共は、畫家がどんな人生を看たかを覗いて見る窓である。額縁は單に繪畫を壁から區切りする垣ではない。畫家が一幅の畫面にあらはした人生の一斷面相を、最も能く看取し得る覗き窓である」と、力の籠つた調子で警句を吐く。

ペーレーは不平を並べて、

「繪畫の掲げ場所は高過ぎます。天井近くではトテモよくわかりませぬ。教室に掲げる繪畫は、裝飾が主か鑑賞が主か。若し後者だとすれば、能く見える高さに掲げたいと思ひます。そして中には、田舎者が壁の破れ穴かくしに掲げて居るやうな、随分低級な繪もあります。それに配列の仕方も釣合がとれてるませぬ」。

最後の批評に反對する者は少くない。反對の要領は、繪畫はそれ自身の本色を最もよく表はすやうに掲げればよい。又配列せられた各繪畫は、全體として一つの繪畫であらねばならぬ。兵隊の行列みたいに配列しては却つて見にくい。但し何れにしても、能く觀て樂しめる高さに掲ぐべきであるといふことは一致して居る。

先生は言葉を挾さんで、

「兎に角、之れ等の繪畫は不當であるといふことは、全級一致の意見である。それなら私共は、何うすれば最もよいのですか」。

「ほかのものと取り換へればよい」と、叫ぶ者がある。

「何うして他のものを手に入れますか」との先生の問ひに、色々な意見が出る。

「寄附を募ればよい」……音楽會を開いて入場券を賣つたらよい……校主にモットよいのと取り換へて貰へばよい……菓子賣上利益金で買つたら何うでせうか……菓子賣上利益金とは、級の有志者が、教室の生花代や、又、學校旅行の時に必要ある級友の補助などのために、休憩時間に販賣して得たものである。

「それはよい考へだ。バストル、其金高はどれ程ありますか」會計係として信用のあるバストルは、直に貸借勘定表によつて残高を示す。兎に角、之れを基として事を始めよう。そして若し不足したら、寄附金を募ることによつと、大體まとまりがつく。決議の概要を學校新聞に載せる案文を相談して課業の終りとする。

金曜日の午後に級會が始まる。

「私共はどんな種類の繪畫を買つたらよいでせうか」

「物語の繪畫を買つたらどうでせう」

「戰爭畫も少しは欲しいものです」

「如何なる繪にしても、原畫になるべく近い色刷りのものがよいと思ひます」

「こんな意見が可なり多く出たが、其の中で最もと思はれる意見は、

「私共は國文では定評のある名著を読み、音楽では世界的に名高い作曲と作家に接せよ、よしやそれが蓄音機であつたにしても云々と、教へられて居るやうに、繪畫でも傑作を鑑賞するやうにしたいものである」。

「傑作ですつて！」と、トローラーは嘲笑を含んだ調子で叫ぶ。

「左様なものは、國立美術館などに行かなくては、逆も駄目です。一枚買ふにも數萬金を要します。のみならず、傑作は大抵ツマラヌものです。私は何度も美術館に行きましたが、いつも期待を裏切られて、ボンヤリして出て來ました」

「あなたは、傑作の傑作たる點をお味ひになることが出来ないのであるか」と、一女生は述べる。更に言葉をつづけて、「トローラーさんは此の間までは、いつも探偵ものを讀んでゐたのでせう。そして、昨今は努めて古今の名著を讀んで、こんな趣味の深いものを何ぜもつと早く讀まなかつたのかと、後悔してゐらつしやるのでせう。それと同じやうに、努めて傑作に接せられると屹度お好きになると思ひます」と、快めず臆せず自分の思つたことを卒直に述べる。

「幾らかの傑作は、學校の美術室にもあります」と、一男生は話す。「けれども、それは眞物でなくて寫眞版ですが、随分立派なものと思ひます。併し級の諸君は、色刷りでないから好かれんかも知れませぬが」。

先生は各生の意見に賛意を表し、トローラーを慰め勝ちに、

「トローラーの言つたやうに、美術館見物は可なり疲れるものです。それは、見るものが餘り澤山あるのと、一度にすべてを見ようとあせるからであると思ひます。トローラー、君、此の次に見に行つたときは、君の最も好きな繪を一つ見なさい、ゆつくり見なさい、他のものを數多

く見ようとあせらずに、一度に一つ、そしてゆつくり」といふ方針で觀なさい、さうすると近いうちに又觀に来ようといふ氣になるに相違ない」。

トローラーは、先生の注意を一々最もと點頭いて居る。一度に澤山の傑作を味はうとするから困難なのである。傑作はちよつと見するものでなくて、ヂーツと眺めるものである。それと室を同じうすべきものである。室を同じうして朝夕親しめば親むほど味ひが出るものであるといふことを了解する。

最後に決定した、繪畫選擇の方針は、

- 1、名畫の模寫で原色に似たもの、
- 2、觀て楽しみがあつて、原作を想ひ起させるもの、

復寫した名畫集が出版せられてゐて、比較的安値で求められると聞いた者があつたので、級から四人の選擇委員を選出して、全權を委ねることにし、四人の委員は男女半數に定まる。

繪畫は二週間後に掲げられた。女兒の選擇委員は、レーノルドの「無垢の時代」と、「ポーレス嬢と彼の女の犬」の二枚を選び、男兒の委員は、ジョージ・モーランドの「厩の内部」と、ブリニの「ドージ・レオナルド・ロレタノの肖像」と、ホツベマの「並樹—ミッドルハーニス」を選んだ。最後の二枚は寫真版であるが、生徒達の親しみのあるもので、作者と同じ氣持になれるまで、親しんで見ようと願つて居る。

之れ等の繪畫で一方の壁間をふさいだ。他方の壁間を飾るために、學校にある繪畫から出来るだけ良いものを選んでみたが、何うも満足出来ないで、別を買ひ求めねばならぬと思つた。一方の壁間は空いてゐるが、つまらぬものを掲げて、折角求めたよいものの力を殺ぐのを恐れて、其の儘にして置いた。積立金も残り少なくなつて居る。

暫くの間は、繪畫について色々の質問もあり感想もあつた。トラーは、嚴めしい、薄唇の殘忍相を帯びたドージの肖像と、其の一生を想ひ合せて、如何にも感心したやうな態度で、「本當だ、能くあらはれて居る、彼の性格をつくりだ」と、獨言してゐる。

繪畫に關する級全體の討論もすみ、教師も亦繪畫について彼等の感想を強いて書かしめるや

うなことをしないので話も日一日と下火になつたやうである。生徒はだん／＼繪畫に親しみ、興味の隆を見張つて凝視めて居る者も漸次多くなつて來た。其の後時を経て、級の揭示板に書目録が張り出される。生徒中の有志者は、學校の圖書室、貸出文庫、公共圖書館の目録中から、教室に掲げてある繪畫と作者に關するものを拾ひあけて來たのである。研究者の便のために。

*

*

*

*

編書曰く、教室を其の級の個的色彩を表はしたものに努めるといふことは、何といふ意味の深いことでせう。學校は一つの有機體であるが、有機體の發展は、複雑中の統一あることに因るのではあるまいか。兵營の宿舍の如くに、型に入れて壓し出したやうな千篇一律は、果して學校といふ一大有機體を進展せしめる所以であらうか。型に嵌めれば、外形的に規律整然として居るから、素人を喜ばすには出来るが、内部的生命は硬化して發展の躍動はない。型を破れば、百人百様の活動と生長があるけれども、常軌を逸して團隊の結合力を強くし、自滅を招くことがある。要は大目標を一にして、進み行く道程は各自の得意に従ふやうにすればよいの

である。複雑中の統一とは、此の意味に外ならない。

英國の學校の教室を見ると、名畫の複寫を掲げてあるものもあるが、其の學校出身者で有名になつた人が、在學中にイタヅラ書きしたもので、大切に保存して、學生の目につき易いやうにしてある。編者が牛津の一カレッジを參觀したとき、其の食堂には、學校出身者中の偉人の油繪の肖像が、周囲の壁間に百以上もかけてある。西洋史で親しみのある名もある。こんな食堂に這入ると、清い心と強い決心と感謝の念が湧くことであらう。

三 文學俱樂部の創設

生徒達が組織して居る學校文學會は、教育上頗る大切な會合である。男女生とも中學年に進むと、此の會に加入するのが常である。されど大抵の者は、一度か二度出席すると出なくなるのが多い。それで、此の會合は、上學年中の熱心者に依つてのみ保たれて居る状態であるから、中學年生に對しては何んとかせねばならぬとは、皆の氣づいて居る點である。何を何うしようかの實際的解決を知るために、中學年の教室を覗き見して見よう。

「皆さんの中で、今年學校の文學會に加入した方はどれ程ありますか。殆んど大多數の者が舉手する。其の舉手は如何にも元氣のないものである。」

「今も缺かさず出席して居る方は、どれ程ありますか。僅かに六人しか手を舉げて居らぬ。」

「出席しない原因は何處にあるのですか。會は放課後開かれるからですか。……色々な活動をして居る總ての會合は、放課時の四時十五分後に開かれるのが定例である。」

「文の高い几帳面なパーキンスは、他の者の言はうとすることを代表して、」

「さうではありませぬ。私共は興味がありますれば、放課後居残ることを少しも厭ひませぬが、文學會には丸つ切り面白味がありません。」

「丸つ切り？ あなたには高尚すぎるのですか」と、先生は獨言のやうに口ずさむ。生徒は口々に述べ出す。

「いえ、高尚すぎて分らぬことはありません。よく理解出来ませんが、面白味がないのです。」

只それだけのことで……私共はまだ読んでゐない書物についての上學年生達の意見を、ちよこなんとして聞いてゐるのは、息づまるやうに苦しいです……上學年生達は、自分等の都合ばかり考へてゐて、私共中學年生の興味を少しも考慮してくれませんか。そして、又、私達から代表者を出させてくれませんか……上學年生達の談話朗讀も、今少し面白くゆけさうなものです。大抵は古臭い書物から、長々と抜き書きして、單調に讀みあけられるやうな感じがします……」

『あ、分りました。皆さんは文學的興味が薄いのです、さうでせう？』と、先生は附け加へる。パーキンスは再び級友の代表となつて、

『先生、私共は文學に少からず興味を持つてゐるつもりです。先生も度々それを認めて下さいました。私共はまだ讀んだことのない材料に對して、興味は起りにくいのです』

先生は、『なるほど、さうです』と、うなづかれる。其の時パーキンスの隣席に居るドーソンは、

『シテ、討論も比例代表選舉といつたやうな無趣味なものです。こんなものに興味のあらう

筈がありません。モット私共の生活に近くて、切實感の強い討論題はないものでせうか』と、附け加へる。

『よろしい、ドーソン、君の言ふことは、寧ろ上學年生は中學年生に比べて、進歩してゐることを裏書して居るものでないでせうか』

『見様によつてはさうも言ひます。併し上學年生の方達は、比例代表といつたやうな困難な問題を、私共中學年生にも興味あり理解し易いやうに取り扱はれることは、一層進歩してゐることを證明するものではないでせうか』

先生は此の意見に感心させられたやうであるが、さうとは明言せずして、

『兎に角、私共は何うしたらもつともよいとおもひますか。私共中學年生は上學年生並になるには、相當に時日を要します。モット勉強し練習せねばならいませぬ。此の問題に可なり時間をかけました。まだすべき課業を持つてゐますから、もうよい加減に切りあけてはどうです』

『先生、私共だけで文學會をつやつてはいけませんか』と、一女生は述べる。『さうも私共

がお互に發表し、お互に研究することになりましたなら、罷くわかりますので、面白くありませんでせうか。出来ることなら私はさうしたいと思ひます。』

『それはよい考へです。中學生文學會といふやうなものを設けようといふのでせう。』

『ハイ。でも、そんな名でなくて、何かもつと氣のきいた名をつけたいと思ひます。』

先生は暫らくチーツと考へてゐて、

『どうでせう、五樂俱樂部としたら。五樂とは、目と手と耳と口と頭の五つを樂ますといふ意味です。言ひ換へると、讀み書き聴き話し批評の五つの修養を樂しむといふ意味なのです。』

『さう致しませう。そしてB組の仲間に入れては如何でせうか。寄附金を貰はぬことにして、私共の力のみで創立させよう。私共はすべて加入して、止むを得ない場合の外は、毎會出席する義務を負ふことにさせよう。』全級は熱烈な拍手を以て賛意を表はす。

『先生、會章を定めては如何でせう。學校にあるどの會も徽章を持つてゐませんから、私共も定めた會章を身につけてある必要はないと思ひますが、會の宣言書や、學校雜誌の記録などに會章をつけると、トテモよいと思ひます。』

『それアよい』と、先生の聲に力がこもつて居る。『シテ、何かよい考へがあるのですか、サムソン。』

サムソンはハタとつまる。併し他の者が次から次へと意見を述べる。

『FCの文字のある楯……熱心に書いて居る子供……大きい鷺鳥の羽毛ペン……空中を翔けて居るペン……ペンを指したインク壺……ペンを指した翼のあるインク壺……』

『翼のあるインク壺はどうです、好きでせう』との先生の意見に皆大賛成である。『それでは翼のインク壺に決めます。圖案は誰にしますか。』

大體の下繪と考案は圖畫の先生の指導を受けることに定め、半學期間の行事の概要と、B組に對する五樂俱樂部勸誘文の草案を纏めて時間の終りとする。

半學期の終に、學校雜誌に五樂俱樂部の趣意書があらはれる。氣のきいた會章は、際立つて讀者の目をひく。趣意書は一女生の手になつたものである。女生は罷く此のやうなことに特殊

の手腕を持つて居る。次に趣意書から二三の文句を採りて見よう。

五樂俱樂部は、誕生の日猶ほ淺いが、見事に秩序だつた社交俱樂部であつて、今後學校の教育的活動に、著しい地位を與へられることと信じてゐます。

五樂俱樂部は、澤山の特徴を持つてゐるが、學校内のどの會にもない誇るべき特徴は、部員から會費を徴集しないことである。部員は物質的余剰を支拂ふ代りに、精神的努力を支拂ひます。

五樂俱樂部は、會員の多數と會費の多額を誇りませぬから、會員と會費の遞減のために、龍頭蛇尾に終る心配は毛頭ありません。

五樂俱樂部は、進んで加入する熱心な部員のみで組織します。決して加入を勧誘させぬ。茶話會を開いて會員の熱心をつなぐ必要を感じませぬ。

次の週の或る日に五樂會が開けまして、部員の一人が「或る少年の讀んだもの」といふ題で話をする。彼の雄辯と引例の巧妙なのに、感心せぬ者は一人もない程であつた。その他現在の學校文學について非難する者あり賞讃する者あり、各々熱心に自己の意見を發表するので、非

常に緊張した趣味の深い會であつた。

二月二十一日の例會は、男女共學の討論會で、「男女共學は健全なる國民教育上最良の方法である」と決議する。二月二十八日の例會は、「お膳の宿がへ」であつて、當日は最も上品な滑稽諧謔を用意して出席することになつて居る。

五樂會は指導者である先生が、熱心で鋭敏で指導宜しきを得たために、意外に生長が速かである。文學的作品も日に増し多くなつて来て、一ヶ月毎に一卷の書物になる位の勢ひである。作品中優秀なものは、生徒の批評會を通して賞を受ける。最近新聞社主催にかかる文學獎勵會で、優秀賞をから得た傑作も出て來た。

編者曰く、西洋の學校では、學生間に色々な種類の會があつて、各々自分の好きな會に加入して居る。斯る會の教育的價值は頗る大きいものである。單に各生徒の特長を伸ばすのみでなく、一つの社交俱樂部であつて、社會的修養の道場である。自治の養成機關である。教室學習

は入用になる基礎工事で、倶楽部は完成工事ともいふべきものである。此の兩者は對立する性質のものでなく、互に密接な關係を保ちつつ相提携してゆくところに、人間が出来あがるのである。我が國の學校に、此のやうな性質の會が出来にくい一つの原因は、教室學習に追ひまわられて居るためであるまいか。

學生の親密をはかる會といへば、直ぐ茶を啜り菓子を食べ福引餘興を聯想せしめるが、之れは學校に於ける社交倶楽部としては感心した方法ではない。學生は、毎日の生活に根ざしそれを向上せしめるやうな性質の會合を本體とすべきである。

四 學級討論會

辯論を練る一番良い方法は、學級討論會である。けれども學級討論會は、往々情氣を帯びて来る。情氣を帯びないにしても、效果の少いのに失望することがある。大多數の生徒は、興味を感じぬのか、臆病で話し切らぬのか、討論は二・三の優秀生の獨舞臺で、其の他はすべて傍聴者といふ有様になり易い。此の缺陷を矯正するには、どうしたらよいであらうか。こんな考へ

を持ちながら教室を覗いて見る。甚しい情氣をおびた教室ではないが、又生氣のある教室でもない。時間割には國語になつて居る。

先生は、生徒一同に訓諭めいた話をして居る。私の覗いたときは、話の大體はすんで結びかかる頃であつた。

『私は、皆さんは能く質問せられるのを喜んでますが、此の前にも話したやうに、此の間の討論會は、殆んど討論會といふ名を附けかねるものでした。シモンズとペラとパーキンス位が意見も持つてゐるし發表もしてゐるから、彼等こそ討論はしたものの、他の何十人は行儀のよい傍聴者に過ぎなかつた。あれでは誠に困つたものである。どうしてあんなことになつたのですか。』

一生徒は自信のありさうな顔つきをして、勢よく手をあげる。

『先生、意見のないものは、言ひやうがありません。』

「女生は、『討論題は私達には興味の薄いものでありました。あれは男子の問題であります』。『能くわかりました。此の次の會を生氣のある有益なものにするには、あなた方すべてに、興味のあるやうな問題でなければなりません。誰かそのやうな問題を選んでくれませんか。何か面白い考へがありませんか』。

澤山の手がある。熱心に振つて發言を求めて居る者もある。先生は暫らく見まわして居る。これならと思ふ生徒にあてるつもりであらう。

『佛蘭西はルール地方を占領するのは正しいことであるか』といふやうな時事問題を提出する。之れに暗示せられて、新聞雜誌を賑はして居る色々な時事問題が出る。先生は、斯様な問題は討論の根據となる事實報導の確否を定めにくいのみでなく、政治・經濟・外交・文化等多方面に關係して居るので、小學生の討論會としては困難であるわけを説明して、すべて省くことに注意を與へる。

『皆さん自身の意見を言ひ得るやうな問題を選びなさい。人の意見を取りつがねばならぬやうな問題を避けた方がよいと思ひます』と、先生は注意する。

『今日英國に行はれてゐる、娛樂運動のための狩獵は残酷ではないか』といふ問題を出した生徒があつたので、教師は全生に聞いてみると、残酷と思ふ者は大多數であつたから、
『大多數者が残酷であるといふ意見なら、討論の餘地は非常に狭く少いから、面白く有益な討論會にならないと思ひます。私共は熱烈に議論を闘はし得るやうな問題を見つけなくては行けないのです』。

其の後も少からぬ問題が出されたが、出される後から熱烈な議論のある問題といふ標準に照らして葬られて仕舞ふ。斯うして進んでゐる中に、生徒もだん／＼問題選定に巧となり、面白いものが續々とあらはれる。

『古への騎士道的精神は死滅したであらうか』……少女を喜ばす問題である。

『宿題は不必要である。廢棄すべきものである』……運動競技好きの少年達を喜ばす問題である。

『男子もすべて家事を學ぶべきである』……之れは裏面に男生を攻撃するやうにもとられ易いから、男生から直に、

『女子もすべて自分の鉛筆は自分で削るべきである』といふやうに、落骨に一矢を酬いたので、兩問題とも先生の注意によつて撤回する。

最後にあらはれた問題は、全生が興味を持ち、反対意見も略ほ同数なので、採用することに決定する。それは、

『少年少女は共學にすべきものであるか』……英國では男女共學は珍らしい方で、此の學校は其の珍らしい一つである。此の問題に對しては、彼等は直接生活上豊富な經驗を持つて居るから、従つて意見も多いことであらう。

兩方共自分達の首領を選挙する。種々な注意と告示は學校掲示板に張りつけられる。當日までに遺憾なき準備をなすべくお互に勵んで居る。先生は、當日には演說草稿と要領の抜萃を用意してくるやうに勸めて居る。首領は級生の意見を自分の方に傾かしめるやうに努力し、味方の話手をして常に味方の有利になるやうに話さすべく注意せねばならぬと教へて居る。

討論は進行して居る。最初に登壇して意見を述べて居る一生は、草稿を手にして十分練りあげた言語と思想を注意深く述べて居る。若し今少し私が早く来て居たなら、草稿を持つて居る手がブルブル顫へてゐるのを見られたであらう。それは熱辯の餘波でなくて、演壇に場慣れないための顫ひを。併し話の進むに伴れて落ちついて來たのであらう。今は殆んど顫はない。先生も若い辯士に大膽でしかも細心であるやうに特に訓へてゐるらしい。彼は大體次のやうに結論する。

『……議長殿、私は男女の共學は自然であらうと思ひます。男女は家庭に於て共存するが如く學校に於ても共存するのは最も自然な仕方であると信じます。そして又、男女共學に因つて、女子は男子の無作法と兇暴を矯正し、男子は女子の自恃と運動熱を向上させます。私は男女は共學たるべきものであることを力説して此の壇上を退きます』。

ヒヤ／＼と叫ぶ味方の齋唱は、ノー／＼と叫ぶ反對黨の聲と混じて一種の騒音となる。

第二の辯士は賛成演說を述べる。

したことを光榮とするものであります。男女共學の至當であることは、誠に明白な道理でありまして、苟も健全な常識を有せられる方は、賛成せざるを得ない事柄であります……」

第二の辯士は、第一の辯士であるジョーンズと違つて、草稿を持たずに話して居る。多分お父さんか兄さんに演説をコーチして貰つたのかも知れん。そして演説中に、鹿爪らしくジョーンズ君やロビンソン嬢の意見を引き合ひに出して、味方に有利なやうに述べたてて居る有様は傍からきいてゐると一種の喜劇を見るやうであるが、當の本人は頗る真劍なものである。

次に反對者が登壇して意見を述べる。其の概要を摘記すると、

「……男女共學であると、男は骨のない柔弱者となり、女はお轉變になるとは世間一般の定評である。又男女間に不健全な競争が起り易いのも事實である。女子が居るために、つまらぬことをする男子に、鐵拳制裁を加へることは出来ない。男女共學では男女同等に取扱はねばならぬ。そして女子に鐵拳制裁を加へるわけにゆかないから、男子も女子同様に留置とか△とかを附ける位な手緩い制裁を加へるので、ます／＼軟骨になるのである……」

議長——先生は一般討論に移るべき時刻になつたことを宣告する。

中には自信のない不安な態度で話す者もあつたが、二・三人は儘に傾聴に値する雄辯であつて、反對黨を沈黙せしめるやうな巨弾を盛に投げつける。暫くして討論がとだへる。ヒソ／＼話が始まる。何とか局面を展開せねばならぬ状態になる。議長は起立して、

『淑女並に紳士諸君、儘に諸君の中には、何れかに賛意を表はしたい方は少からずおありのことと信じます。どうか速に起立して賛否の意をお述べ下さい。』

何等の反響もない。すべての者は何か切りにノートに書いて居る。言はんとする要領であらう。議長は再び述べる。

『話すことを澤山持ちながら、遠慮勝ちの方があつてやうに見受けれます。此の箱の中に諸君の氏名を記したカードが這入つてゐます。諸君の中から誰か一人來て、此の箱から六枚乃至八枚のカードを手さぐりに出して、順序よく此の卓上に並べて下さい。其のカードの順番に意見を發表することにしてほしいと思ひますが、御賛成でせうか。』

まぢくではあつたが、すべて擧手する。此の方法は明かにすべての者の遊戯本能にピッタリとあつたものであらう。

八人のカードが引き出される。最初の番が讀みあげられる。他の者は急に各自のノートを見はじめ。此の次に當りはすまいかと氣遣つてゐるからであらう。第一の順番者は、興奮して言葉がもつれ勝ちになるので、議長は自分の義務を忘れて、しつかりした聲で、ヒヤ／＼と聲援し、興奮した辯士の心を落ちつけやうと同情して居る。此の聲援の効果は直にあらはれて、辯士の腰は伸び肩は張り手は演卓から離れる。今の今までは、溺死者が藁を掴んで離さないやうに、両手で卓縁をしつかりと握りしめてゐたのに、それが聲援に力を得て卓から獨り立ちし二・三步前に乗り出して、力のこもつた簡潔な小演説をする。

第二の順番が出る。ウツカリ口を滑べらしたので、攻撃が起る、辯護が出る。一度に二・三人も話す。議長は秩序の回復に努める。各々熱烈に論難してゐる。的を外れた非論理的なものもあるが、彼等は非常に面白がつて居る。丸々と肥え太つて眼鏡をかけたデブ君——運動場では此の渾名で通つて居る——は、教室ではいつも居眠りしてゐるのであるが、此の時ばかりは面

白がつて目をバチクリさせて聞いて居る。時々小氣味のよい文句で敵を凹こまします者があると有頂天になつて机を拳骨で叩いて居る。半分立ちかかつて何か言はうとすることもある。

時刻がきたので、討論終結にする。四十人のうち、十人の多數を以て共學を可決する。終業のベルが鳴る。一生は起立して此の次の週にも討論會をしたいと言ふ。先生は、お菓子ばかりでは生きてゆかれぬと有める。それで翌月に開くことになる。各自適當な討論題を紙片に書いて、記名して教卓の上にある箱に入れておく事に定まる。教卓上の箱は、生徒が擔任先生に對する個人的要求や希望や願ひを書いて入れて置くために使はれるものである。最初の間は、生徒は使ひ慣れなかつたが、漸次其の利便を知るやうなり、先生も時々思ひがけない金礦にブツつかることがある。

編者曰く、立憲政治の搖籃地ほどあつて、英國の生徒は、サスガに討論的研究に慣れたものである。編者は一日倫敦の一女學校の參觀に出かけた。此の學校は、特に生徒達の自學自修に

努力して居る特色のある學校である。學習の一形式に討議研究といふのがあつた。これは正科の學習に關聯して、時事問題について研究し、其の結果を持ち寄つて、互に意見を交換批評して、意見と辯舌を練り、修養を高めてゆく目的の下に開かれるものである。先生は議長であつて、出席者は各々賛否兩席の何れかに着席する。意見のなき者は傍聽席に着く。討議は秩序整然たるもので、議論が熱してきて決して淑女の態度を失はない。自分の意見の不合理を指摘せられて、論敵に感謝する者もある。大抵の者なら、自分の意見を打ち破られると、大いに含み、機會あらば言葉尻を捕へ揚足をとつて一矢を酬ひようとするものであるが、左様な私情に驅られる者もなく、却て論敵に感謝する者を見て少からず感心した。

五 學校劇の學習

學校劇は作文のうちで、最も愉快なものである。それは、劇を書き暗誦し表現するといふ愉快さのみでなく、新しいものを作り出したといふ創作の味も愉快である。此の愉快は、劇を上演することによつて其の極に達し、それまでに費やした教師の苦心も生徒の努力も、却つて

愉快の思ひ出に過ぎないやうになる。

學校劇の指導は單に教室に於て、「サア今日は一つ劇を書いて貰ひませう。題材は自由に選びなさい。來週の此の時間までは仕あけて下さい」と、いつたやうな單純なことで出来るものではない、學校劇指導の中心點は話方の練習である。其の話方は、歴史上の人物、お伽噺中に於ける人物、實生活中の人物の間に於ける對話の練習に重きを置く。對話の練習は、對話體の文を作ることと伴はねばならぬ。對話といつても、事實と人物に即したものである。其の人物の性格、人生觀が、事實中に活躍して居る一場面を把握し、對話を中心にして場面を展開してゆくのである。七面倒な理屈はぬきにして、劇作をして居る教室を覗いて見よう。

隅にある黒板に、レッド・ライディング・フッドの劇化譯文の梗概が書かれてある。生徒達（十三歳の男女）を今迄に、作文で會話體の文を数多く練習したのに相違ない、言ふことが中々要領を得て居る。

今し方、二人の少女は第一幕のフツドの田舎家の一室を讀みあけたので、級友の批評を受け
て居るところらしい。赤毛の少年は、

「彼等の話振りは暗誦の口調で、不自然のやうに感じられます」

「口調は後から研究してもよいでせう。先づ初めに會話について吟味ませう」と、先生は答
へる。

「會話について批評はありませんか」 數名舉手。

「フツドは餘り落ちついてゐるやうに見えます。今少し興奮した状態をあらはさねばなりませ
ぬ。フツドは實際興奮して居ると思ひます。籠の中に何かあるのか知りたくてたまらぬのは、
少女の心理でありますから、お母さんのお話を長々と黙つてきいてゐる筈はありませぬ。乾度
お母さんのお話の中に、次から次へと質問を挟むに相違ありませぬ」と、レッタは述べる。

「よろしい。まだほかにありませんか」

「フツドはお母さんのお話を聞いてゐる時に、彼方へゆきたくて、何度もくぐ立ちかかるやう
なムズ／＼した動作を、知らず／＼のうちに、するだらうと思ひます、決してチーツとしての

ません。そして又レッタさんの申されたやうに、幾度も差出口をすることも思ひます」と、レ
ッは言ふ。

「お母さんが少女に話すことは貧弱です。今少し少女の心を捉へるやうな、内容と表現を持た
せたいものです。又彼の女は娘に時々、もつとチャントとしてお聞き、靜かにしてお聞きと、
注意したと思ひます。少女は人の話をきく時には能く手おもちやしたり、ムズ／＼したりする
ものです」と、級中で一番ひよる長い電信柱君は、得意氣に少女席を一瞥して着席する。

先生は、今が注意を喚起するに、最もよい機會であると思ひ、

「皆さんの述べられた批評は、すべてよい批評である。それで、皆さんの言はれたことを、演
者に心得させて置く方がよいと思ふが、何うしたらよいでせうか。それとも會話だけにして置
いても、演者は私共作者の心持を解してくれるでせうか」

「注意書を書いたら何うでせうか」と、ピリングスは述べる。

「その方がよいと思ひます。何處にどの様に注意を入れますか。皆さんが今までに讀んだ劇
について考へて見て下さい」

注意書はイタリックにして、括弧して、會話中に挿入であるのが普通であるが、本文と隣しておくで見にくいから、注意書だけには赤線をひくことにきまる。かうして教師と生徒は第一幕を完成する。

次の月に同じ教室を覗いて見たら、生徒は皆自分の席の上に、五・六枚乃至十四・五枚とちたものを持つて居る。生徒や先生の話すことを聞いてみると、それは生徒が作った劇をお互に交換して讀んだので、今日は自分達の讀んだものを一々批評研究して、實演するものを選び出すのである。

『よいものがありましたか』と、先生は尋ねる。十数人舉手。

『よろしい、これから皆さんで吟味して見ませう。パートル、君の讀んだのを話しなさい』。

パートルは級中の傑物で、級友の尊敬を集めて居る生徒である。

『此の劇はわるいことはありませんが、お伽噺で、私共には餘りに子供らしくあります。それ

に筋はありふれたもので、新鮮味がありません』。

『お伽噺の故を以て非難するのは當りませぬ。お伽劇は、ロンドンの劇場でも上演されます。そして成人達も澤山観にゆきます。兎に角、私は後から讀んで見ませう。エルラ、あなたの讀んだのは？』。

『私共は能く活動で見るやうな種類のものであります。泥棒や強盗や人殺しが出て來ますので、私は好きませぬ』。

先生はそれに賛成の意を表し、ズン／＼片づけて、今度はサムソンを指名する。

『私のは創作です。否、私が創作したといふではありません。私の讀んだのが本當の創作であると思はれるのです。併し此の劇の實演は、困難であると思ひます。一幕は海底であつて、色々な魚が出てきますから』。

『多分實演は困難でせう。併し、全然不可能ではありません。沙翁劇では此の困難を征服してゐるでせう。實演しようと努力すれば、出來ないことはありません。兎に角、私も讀んで見ませう』。

斯のやうにして批評研究補導が進行する。筋の單純な事實ありさうにもないものは、一々相當の理由をつけて除かれる。時々原作者は、作者の眞意のあるところを述べて、批評者の再考を促し、自作の辯護をする。想像は豊富であつて、エリザベス時代の作物に似たものもあるが學校劇として實演困難の故を以て省かれたものもある。

最後に比較的良いものが六つ残つた。先生は素早く目を通して、それ等を讀んで來た者に渡し、彼等の意見を述べさせる。題名を黒板に書いて、之等の中から良品を三つだけ投票せしめる。選擇されたものは皆立派な作で、筋は創意で、事柄は實際的で、男女とも興味のあるものである。最高點を勝ち得た作は、「時計の針を進ませて」である。日歩の長くて夜あけの短い夏の日、お互に寢坊してお互に詫びあふ夏の日、時計の針を進ませて休む夏の日も近づいたのである。

三人の當選者は、實演者を選び、役割を定め、暇を見つけて家庭や學校で、對話の暗誦や表情などの研究と練習とに熱心である。

二週日後に劇は實演せられる。劇の良否は實演によつて定まるといつてよい。時計の針を進ませて」は最初に演ぜられることになる。

此の劇の舞臺監督は随分氣のきいた生徒と見えて、教室の入口の戸には劇に似つかはしいビラを張り、入口を通つて坐席につくと、コンニャク板で登場人物と其の役割、舞臺面の説明などが刷つてある。舞臺は何處にもないから、不思議に思つて注意して見ると、床上にチヨークで一線をひいて、舞臺と観客席の境界にしてある。舞臺の左右に出入口がついて居る。卓子の背後の壁に、ボール紙製の時計面をピンで止めてある。針は動かして居るやうになつて居る。舞臺といふのは、ただそれだけであつて何も無い。卓子上の裝飾品や、本ものの食物を何處から持つてきたのか先生も驚いてゐる。

机に腰かけてゐる観客は待ち焦がれて居る。劇についての想像と期待を話しあつて居る。進行係が卓子をコンニャクと打つ。話聲はピタリと止まる。国立劇場にもないやうな靜肅裡に開幕

となる。開幕といつても幕があるのではない。

第一幕、フレダとバメラは舞臺にあらはれて卓子につき、伯母さんの嫁入のことや、其の時に着る自分達の衣裳のことを話しあつて、明日は待ち遠いともどがしがつて居る。そこへ祖母が這入つて来る。白い髪を冠むり、眼鏡をかけ、黒い上衣を着て居る。お前達は何處からこんな物を持つてきたのかい？と言つて、一所に食べ始める。實験ムシヤ／＼やりだしたのは驚く。暫くして祖母は時計を見て孫共に、サウ／＼、今日は一時間早めて置く日だよと注意する。孫共はうなづく。夕飯がすみ、後片付もすつかり終る。フレダは一番あとまでゐたので、室を出るとき、忘れないうちにと思つて時計の針を進ませておく。やがてバメラが這入つて来て、屹度時計のことを忘れてゐるに違ひないワと獨言して、又一時間進ませる。最後に祖母がやつて来て、マア早いこと、何時のまにか暗くなつたと、言ひつつ時計を一時間進ませて幕となる。割れるような拍手がやむと、次に起るトンチンカン場面を想像して、急にさわがしくなる。校長は何事が起つたのかと思つて見に来たのであらう。入口の戸からヌーツと顔を出す恐ろしけな大きな頭の持主である。先生が例のことをやつてゐるのであるとわかつて、うな

づき笑つて引き込ましてゆく。

第二幕、フレダとバメラは遅く起きたので、恐ろしいほど氣をいらだてて居る。時計は十時に五分しかない。九時までに伯母さんは来いと言つて居れたのだ。あわてにあわてて着物をきるので、右手を左袖に通したりして、ます／＼氣をいらだてる。トテモ駄目だワと失望の嘆聲を漏らす。婚姻の席に列れず、切角樂んでゐた衣裳も着れず、團子のやうな涙をボタリ／＼と落して居る。祖母は諦めるやうになだめてゐるが、祖母の言葉は言ふあとから涙で洗ひ流される。閉幕。男生は有頂天に喜んで居る。次の幕で目出度く納まるのであらうとは、皆の豫期である。

第三幕、時計の針が十一時十五分過ぎを指して居る。フレダとバメラは不斷着に着換へて萎れて居る。そこへ戸を叩いて伯母さんが這入つてくる。アツサリとした衣服に、ピロードの帽子を冠つて居る（此の幕は一女生の手になつたものである）。伯母さんの話をきいてゐるうちに事の真相がだん／＼明らかになるにつれ、二人の喜びは再び高まつて来る。結婚席に列るために、喜び勇んで衣裳をつけるところで閉幕。此の劇すべてに費した時間は二十分であつたが、

演者にも観者にも緊張した價值のある二十分であつた。

編者曰く、學校劇の教育的價值は、最近、我が國に於ても大いに稱導せられ、漸次立派な作品も出るやうで、誠に喜ばしいことである。何んとかして健全に生長させたいものである。編者のあづかつて居る學校では、學校劇を始めてから三年になる。生徒の手になつた創作品も數百點にのぼり、實演したのも五十に近い。これ等はすべて生徒の生活から生れて來たもので實演するものも、すべて生徒の作品に限つて居るから、彼等の生活を飛び離れるやうな不自然はない。

學校劇を實演するまでにとる普通の順序を述べる。(一)脚本で特別のものは募集するが、普通は彼等の日常の作品から選擇する。(二)脚本が定まると、それを謄寫版にして、曲譜とパツクの考案を募集する。(三)演者と伴奏者は、級から選出せられるのが普通である。以上の如く殆んど生徒の手で運び、教師は補導者、相談役に立つのである。

六 短詩の學習

上學年生の國語の時間である。私が這入つていつた時は、先生は大きな聲で音讀をして居る生徒は熱心に机上の書物をみつめて居る。私はそれを妨げるのを恐れて、靜かに佇んで居る。

あはれ、家といふ家は安らかに眠つてゐる

神々しい大河も、靜かに横たはり休んでゐる

「之れはウアーツウアースが、ロンドン橋上で詠んだと傳へられて居る、短詩の一節である。私は短詩が好きですが、皆さんも愛誦せられることを信じ、且つ希望してゐます。そして皆さんの中には、後の人達に愛誦せられるやうな優れたものを、作られる方もあらうと思ひます。」先生の話は暫く途絶える。生徒達は、書物から目を離して先生の方を眺め、何かを豫期して居る。

「セフトン、読んで下さい」と、先生は指名せられる。セフトンは直に應じて讀み始める。先生は何ぞセフトンを特に指名して讀ませられたかの譯がわかる。それは、此の美しい詩を拙く

読んで生徒に聞かせるのが、堪えられないからである。セフトンは非常に上手に読む。

「サア、今一度能く注意して読みなさい。解らない話があれば、字書を引きなさい。」

暫くの間はシーンとして居る。やがて此處彼處に字書を引く者がある。別に困難な語もないと見えて、字書を引く者も極めて少く、引いても直ぐやめる。

「質問がありますか。」

一人の生徒は、書物に目をつけながら、何か頭の上にある物を、手さぐりでもするやうな恰好して手を擧げる。

「よし、ナンシー。」

「私は、"deals" の意味はハッキリしませぬ。此處では普通使つてゐる意味(險しい)でないと思ひます。字書を引いて見ましたけれど、能くわかりませぬ。」

「字書に何んと書いてあるか読みあけてご覧。」

「大傾斜を以て上下する。絶壁の。液体に浸濡する。浸漬する。血塗れと、書いてあります。そして、一つも當てはまるやうな譯語がありません。」と、ナンシーは答へる。

先生は、なるほどと同意し、級生に相談する。級の長老君は、級中の最高年長者の渾君)答へて、

「私は浸漬するが一番近い意味と思ひます。浸濡するでもわるいことはありません。先生、字書には何ぜ一つの語を説明するに、更に困難な語を用ひるのですが。」

「ソ、大抵の字書は其のやうですね！ やがて賢明な人が出て来て、皆さん方のやうな少女のために、能くわかる字書を作つてくれることでせう。併しそれまでは、今持つて居る字書を出来るだけ工夫して利用するよりほかに道はありません。サア、今一度詩を見てご覧。

太陽は何うしてゐますか。」

「輝いてゐます」と、ジョーンズは唐突にいふ。ジョーンズは頓智の天才を持つて居ると、自ら得意になつてゐる少年である。

「わかり切つことです。太陽は何時、何處に、如何にしてゐますか」と、先生はキメつける。

「早朝に、眩しく、眠つた市を」と、ジョーンズは直に附け足す。

「其の通りです。舟も尖塔も堂宇も劇場も寺院もすべて朝日に浴して居る。即ち皆さんの持

つて居る字書の言葉を借れば、朝日に浸漬して居る。次に、ナンシーが赤かしく思つた行はどんな意味になるのですか。

正しい答はすぐ出てくる。先生の巧な發問は理解を容易にするので、グン／＼進み、忽ち至詩を終へる。先生は、此の詩は作者自身のいふところに依ると、一八〇二年佛蘭西に旅行する途中、大四輪車の二階席で書いたものであると、附け加へる。

「ウアーゾウアースが、輝く旭陽を浴びて靜に眠つて居るロンドンを眺めた時の第一想は、何んであつたと思ひますか」の問ひに、一人の生徒は、

「アア、美しい！　といふ感じであつたらうと思ひます」と、答へる。

「さうです。それがあらはれてゐる行を読みあはなさい」。

正しく読みあける。すべての生徒は、ウアーゾウアースが、ああ美しい！　といふ感じを巧に言ひ表はしてゐることに感心してゐる。

他の生徒達の答へに、「ウアーゾウアースは自分の感じた美しさを描寫しようと思つたであらうと思ひます。……朝日を包む煙もなく、市街は美しく輝いてゐる。……田舎にも見られまじ、

斯くも美しく朝日を浴びる光景は……」

其の他いろ／＼の答へがある。いづれも面白いもので、先生は悉く受け容れる。生徒達は先生の賞讃に勵まされて盛に活動する。

先生は再びあと戻りして、

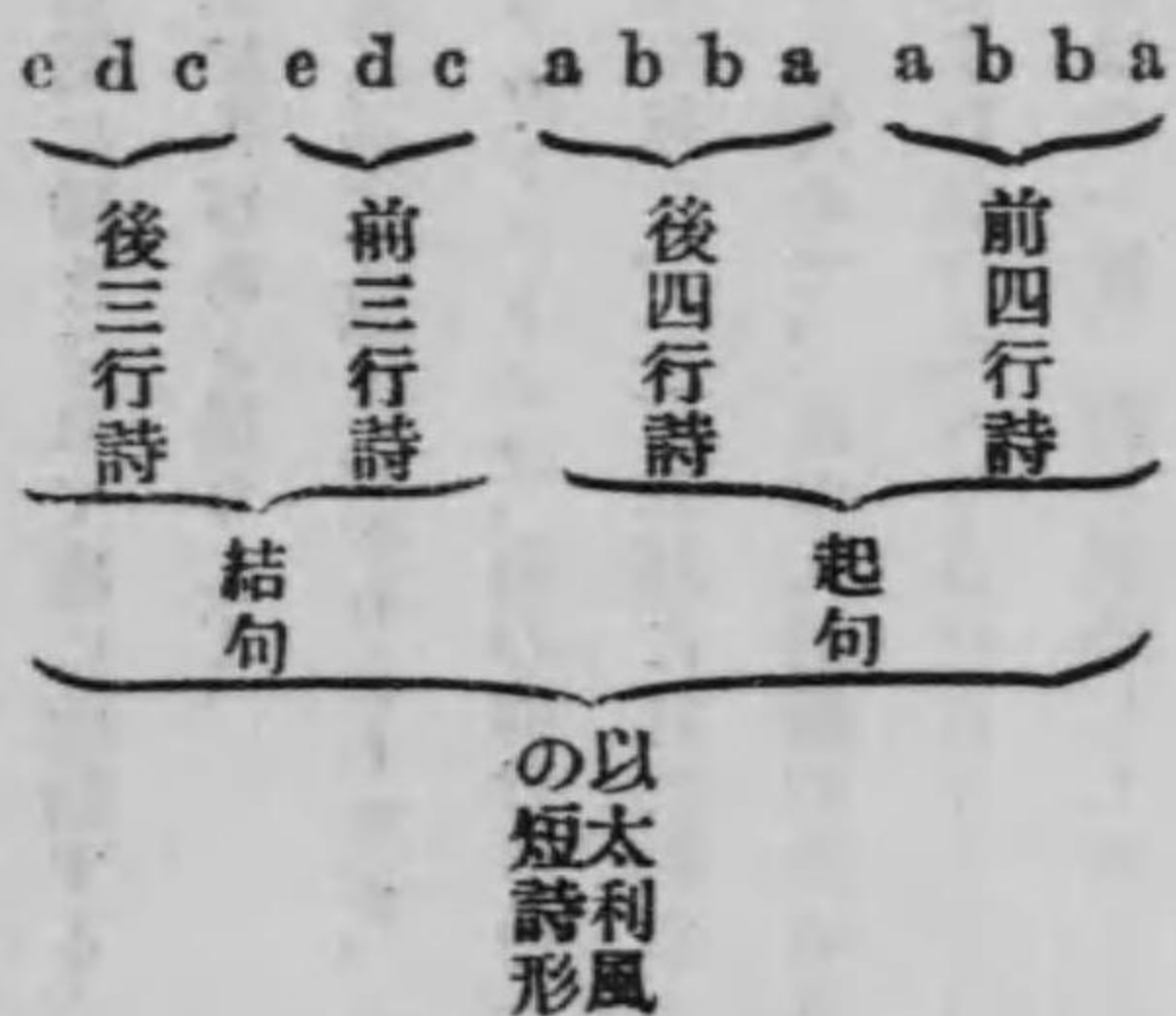
「作者の第一想はわかりましたが、其の他の行の中に第二第三の想が表はれてゐませんか」。

「ウアーゾウアースは、朝の静けさをシミ／＼と味つたと思ひます……靜かに安らかに眠つてゐる市街を見て、不可思議に打たれたと思ひます……此の靜かに眠つて居る怪物は、やがて楽しい夢から覺めて、生の大活動を始め其の活動の騒音と塵埃に踏みにぢられてゆく、此の静けさと美しさを想ひ比べてゐたらうと思ひます……」。

先生は今一度、詩を朗讀して終りとする。

数日後再び同じ教室を覗いて見る。其の間に生徒達は可なり多くの短詩を學んだと見えて、

其の進歩は著しいものである。彼等は既に短詩に十四行詩であることも熟知してゐる。教室を覗いたときは、短詩の構造を研究して居る。此の研究は今が初めてでないらしい。黒板には短詩の構造を概括表にしてある。



此んな面倒なことを小學校で教授するのは、徒に少年少女の負擔を過重ならしめるのみで、全く不必要なことではなからうかと疑つて、覗いて見て居る。併し、案外にも生徒達は興味を

持つて研究して居る。以太利と英吉利の短詩形式の相違を巧に論じ、自由自在に模範例をあげて、言はんとする點を例解して居る。短詩は起句に於て言はんとするところを言ひ、結句に於て例解し擴張する形式のものであることを發見したといつて居る生徒もある。私は以太利風の短詩よりも英國風の短詩が好きである。何となれば、英國風の短詩は最後の二行に依つて主想を捕捉し得るからと、意見を述べて居る生徒もある。

「誰か短詩を作つて見ましたか。短詩は六かしいですが、法則は易いでせう。」

誰一人手をあげる者はない。先生も問はぬ前から、生徒の作品を豫期してゐたのではないらしい。私は先生御自身も作つてみた經驗を持つてゐるのであるのか知らん？ と考へてみる。先生は更に言葉を續けて、

『八〇ページを開きなさい。材料と形式と表現の仕方に於て、ハードレス・オグラデイは何んと説明してゐるかを調べてみなさい。』

ページを繰る音しか聞えぬ。教室はシーンとして居る。

『先づ考へずしては何も書けませぬ。書くべきものを持たねばならぬ。それから、それを表

現する適切な語句と其の配列形式に通じて居らねばならぬ。皆さんは之れ等のことを大抵心得てゐることと思ふ。來々週の今日までに短詩を作つて貰ひたいものです。皆さんなら大丈夫作れると信じてゐます」と、先生はケシかける。生徒達は是非作つて見せるといつたやうな顔つきをして居る。

ハードレス・オグラデイの解説書は、國語の先生は誰でも讀む良書である。其の中に短詩についてどのやうに解説してあるかを抜き出して見よう。

起句……作者は、毛苳の咲き亂れた牧場、綠滴る夏草に輝く牧場、陽炎の面沙のかかつた牧場、古い都を貫いてゆる／＼流れる河、ところ／＼淺瀬になつてサラ／＼流れる河、水流と堤防の間に毒々しい泥土のある河を眺めてゐる。

結句……詩人の頭は、湧きくるいろんな詩想でごつちやになつてゐる。鬼に角、静けさを破る何物も聞へないが、何物も休息して居らぬ。陽光はドンヨリとして居る。微かな風は溜息してゐるやうに感ぜられる。朧ろ色の空は、呪はれたやうに戦いてゐる。白い柔かい羊毛の雲は急いで空に舞ひのぼり、西へ／＼と落ちて眞黒に變はる。

短詩を作ることは、そんなに困難なわざではないが、すべてを取り入れて、調和融合するところに、多少の困難を豫想せねばならぬ。

二週日後に又同じ教室を覗いてみる。先生に、良いものが出ましたかと尋ねて見る。殆んどすべての生徒は作つて居る。よしやそれは本當の意味に於て短詩と名づけられぬにしても、彼等の努力に敬意を拂はずに居れない。

單調な甘い囁きに耳傾けよ

小鳥も小猫も囁きに急ぐ

一日の疲をいやすべく暖いホームに

眞つ赤に染まつた夕空も次第々々に薄れてゆく

眞夏の焦熱について涼しい夏の夕風が吹く。

七月の灼熱の陽光を吸ふた新月は
柔かい光を投げて萬物を甦へらせてゐる。
萬物のこぼした感謝の涙は足許に光りこぼれる。

おゝ東の空は紅さした、旭日のほり
柔かく剥がれ落ちた雪片の雲、ふわりくと飛んでゆく
蝙蝠はそろく退却し始める、門邊を過ぎてゆく

朝日はサラ／＼音たてて山嶺を覗く
やがては無限の大圓となるべく
そして永久に圓く滿つべく

(生徒作)

编者曰く、作文は多く作らせた方がよいことは誰でも知つて居るが、添削が困難なので、
一隔週一回のものが一ヶ月になり、隔月になるのが普通である。编者の學校では、作文の添削
をしたことはない。添削をせぬけれども、喜んで出し、添削をした時代よりも以上の成績をあ
けて居る。先生の補導は生徒の作品に朱筆を入れることでなくて、毎週一回、生徒の作品等に
ついて、作文の眼を開いてやることである。あとは殆んど全く、生徒相互の力によつて伸びて
ゆくのである。作品は、口語詩・和歌・童謡・散文・劇等あらゆる方面にわたり、各級とも毎週一
回、平均五百頁(一人十枚平均)位の文集を出して居る。七百の生徒はすべて和歌をつくる。一
年生でも劇を書く。

まつ白きしやほんの泡にすんなりと我がゆびさきのぬれてうつくし

はてしなく澄みし大空はてしなく續くこのみち秋の日は照る

右わけが物足らなくて今日からは左わけにして落ちつきました

伸びほうだい伸びた薄のその上に今夜も美しく月が照る

作文は口語詩から這入つてゆく方が伸びがよいことは、我が校の妹尾良彦君の十年來の経験で

ある。

七 少年文學ロビンソン、クルソー

先生は誰でも、生徒はすべてロビンソン・クルソーを読んでゐるから、之れを英文學作品の一つとして、嚴密に教室で取り扱ふのは、無駄な仕事であるやうに思つてゐる。ところが事實は全く豫想外である。今日の少年は、殆んどロビンソン・クルソーを読んでゐない、此の書の大讀者から、好奇心を唆られ、興味心を刺戟せられた者だけが読んでゐる位である。それが嘘と思ふなら、試みに受持の生徒について調査して見れば直にわかる。四十人の生徒中、六人も通讀してゐたら喜ばねばならぬ。なるほど讀みかけた者は可なりあるであらう。何處の圖書館にいつても目につくほど數多く備へてあるから、必ず一度は借り出したに違ひない。そして一・二ページ讀んで直ぐ其のまま返へし、通讀した者は減多にないに相違ない。

何うして此の頃の少年は、ロビンソンを讀まないのであらうか。あの書は時代後れになつたのであらうか。あの書は生徒に讀むやうに勤めるだけの價値はないのであらうか。又どれほど

勤めても、讀むやうにならないものであらうか。之れ等の疑問を持ちながら、教室を覗いて見る。

教室に這入つた時は、丁度、讀書について一般的研究をしてゐるところである。研究は多岐にわたり、とりとめのないものであるが、中々面白く有益な意見も出る。だんく話は少年文學に移り、ロビンソン・クルソーも出る。先生は、

『皆さんはロビンソン・クルソーを讀んでみましたか。そんなことはわかり切つたことであるといつたやうな態度で、すべて手をあける。』

『讀み終へた人はどれ位ありますか。僅かに四・五人しか手が擧がらぬ。先生はさも驚いたといふやうな風を装ひ、』

『たつた四・五人ですか。私は皆んな通讀してゐることばかり信じてゐました。すべての英國少年も少女も、ロビンソンを讀まない者はない筈と思ひますが、先生の考へは間違つてゐる』

でせうか』。

數人の者が競つて手を舉げて打ち振つてゐる。先生は何を言はうとするのかを心得てゐるやうに、

『パロース、君は通讀したのか、しないのか』。

『先生、私は圖書館から借つて讀み始めましたが、とても讀み終へる氣になれませんでした。』

『私もさうでした』と、四・五人の者は口を揃へて言ふ。

『何うして讀み終へる氣になれないのですか』と、級を見まわす。

生徒は直に應答する。『……古い書き振りで、解らぬところが時々出てきます……面白くないところがあります。一つの事件を書くのに、長たらしい準備書きがしてありますので、厭きくします……クルソーは、自分の意見や感想を長々と述べ立ててゐます……彼は自分の経験や發明をくどくしく話してゐます……私は自分のことばかり長々しく話す書物を読むことは嫌ひです……談話や記事が甚だしく長いので好きませぬ……』。

意見の大體は、面白くもないことを管々しく書いて、それからでなくては、ホンモノが出て來ないから、好かぬといふことに一致してゐる。こんなに嫌ひなものを、無理に讀むやうに勧めることも考へものである。却つて反抗的に讀まなくなる恐れがないでもないから。何うしたらよいか知らんと、先生は考へてゐるらしい。暫く黙つてゐる。

『ロビンソンの中には、何も面白い物語はありませんか。讀むと心の跳るやうなところはないでせうか』。

通讀してゐる少年達は、先生の問ひに應じて、『ありますく』と、叫ぶので、先生は百萬の應援を得たやうに喜び、『どんなところですか言つてご覧』。應援者達は次から次へと述べるので先生は、

『一寸待つて下さい。とても覚え切れませんから、黒板に書いて見ませう。まだ讀まない方も見つけ出すに便利であると思ひますから』と、三つ四つ手早く黒板に書く。

1、クルソーとサリー・ローバー

2、難破船と荷物の救濟

3、食人鬼の訪問とフライデーの救出

4、蠻人との争闘

5、フライデーと熊の格闘

「マア、之れ位にして置きませう。兎に角、クルーソーにも面白いところがあるやうですね！

パロース、君はどう考へますか」。

「ハイ、さうです。面白いところがあるやうに思はれます。面白くないところが餘り澤山ありますので、面白いところは隠されて、見つかりにくくなつたのであらうと思ひます」と、パロース君は真先に個人的相談を受けたので、頗る光榮に感じたものと見え、彼の答へとしては多少お追従の嫌ひがないでもない。

先生も特にパロースに相談的同意を求めたのは、大に考へがあつたのである。それといふのは、パロースは級中第一の探偵ものの耽讀者で、今も現に探偵物を忍ばせてゐて、機會があれば續きを見ようとしてゐるのである。

「パロース、こつちを見てご覧。さうすると、君は、若しクルーソーから面白い部分だけ引き

出して、つまらぬ部分をすべて除いたら読んで見ますか」。

「それなら読んで見ます」と、パロースは、そんなお誂ひ向きに出來た書物は、あらう筈がないといつたやうな態度で、勇ましく答へる。

「ほかの方も皆読んで見ますか」と、先生は機會を逸せず念を押す。

すべて舉手する。先生は大に満足し、更に言葉をついで、

「皆んな読むのですか、それは結構なことと思ひます。皆さんの言つたやうに、クルーソーの中の或る部分は、少年少女達には本當に無趣味です。そして又、書き振りが古臭いのです。何といつても、今から二百年前に書かれたものであるから、無理もないことでせう。併し、昔から名高い書物ほどあつて、假令、話の運び方は拙いにしても、すてがたい面白い部分のあるのは事實である」。

全級の生徒達は、全く先生の話に丸められて、そんな本があれば讀みたいなと言つたやうな顔をしてゐる。特に隅つこに坐してゐる、太つちよのミミヅク君は（近眼で肥えた少年に付ける通り渾名）、興奮してゐるのが明らかに見える。先生は、此の興味心を家庭にまで持ち歸へら

さうと思つて。

『私は、戸棚にクルーソーの書物を澤山持つてゐます。それはマクミラン社から発行したものである。クルーソーの中から面白い部分だけを抜萃したもので、皆さんの希望通りに出来た書物である。一冊あて貸しますから來週の今日までに読んで見てご覽』。

二週日後に再び同じ教室で、ロビンソン・クルーソーの問題が出てゐる。色々と出る質問や意見を書きいてゐると、豫期した以上に能く読んで來てゐる。假へば、例のバロースは第一週末までに殆んど全部読みつくしてゐる。勿論彼のことであるから、面白くない部分は對角線讀みにしてゐるに相違ない。

先生は案外な好成绩を得たので、非常に喜んでゐる。どれほどの收獲であるかを調べる。調べるといつても、筆答考査とか検査的發問をして、切角乗りかかつてきた油に、水をさすやうな愚はしない。そんな検査の必要があるにしても、それはまだく後のことである。

『まだ讀み了へない方がありますか』四人だけ舉手。

『時間があれば讀み了へるつもりなのでせう』。すべて舉手、但し力のこもつた舉手ではないやうに見える。

『一番面白かつたところはどこでしたか』。議論が續出するので、

『投票して見ませうか』と、先生は一同にはかる。すべて緘成。其の結果によると、「食人鬼の冒險」は最高點である。すべての興味心は更に高まる。先生は方面をかへて、

『クルーソーは事實を書いた本でせうか』。

確かに事實であるといふことに一致する。そこで先生は事實であると思つた理由をたづねる。舉手の洪水が起る。

『……すべての事柄はあり得ることです……クルーソーのすることは、探偵小説の主人公のやうにすることなすことが、いつも間違ひないやうに出來てゐませんから……自分で實際色々な目に出くわさねば、あんなに詳細に目に見えるやうに記述出來ないと思ひます……クルーソーのなすことは、あんな場合にはあのやうにするだらうと、私共の思つてゐる通りであ

りまして、決して人目を奪ふやうな奇抜なことをしてゐませんから……グルーソーは、自分が馬鹿なことをすると、包みかくさず正直に言ひますから。私が今まで讀んだ冒險譚は、大抵馬鹿なことをしない主人公でありました……」。

「よろしい。そして、なぜあんな長たらしい話を長々と書いたのでせうか。皆さんに貸してあげた抄本にも、何であの長話を全く省かないのでせうか」。

「……無人島に一人ぼつちであると、誰でもいろんなことを考へるものであるから……考へないと淋しくてたまらぬからです……自分で長く話して話し続けないと、氣狂ひになりますから……自分の艱苦を訴へて、慰めて貰ふ友達を持たないから、自分で喋りつづけるのです……」。

「わかりました。私も皆さんの言はれる通りだと思ひます。それはそれとして、皆さんはクルーソー自身はどんな人であると思ひますか」。

議論百出である。併し其の議論の中から、クルーソーは勇氣に富んだ智恵のある人で、あらゆる困難と危険を克服し、再び平和と幸福を勝ち得た人であることがだん／＼明らかになる。

生徒達は議論してゐるうちに、彼等の力相應に、クルーソーは人間努力の叙事詩であつて、彼等に與へられた一大教訓書であると、確かに知り且つ感じてゐる。先生は、下手なくだらぬ説教をせずに、彼等をして自ら意見を述べあひつつ、自ら感ぜしめる方法を探つてゐる老練には感心せざるを得ない。

「著者は誰ですか……デフォーとはどんな人ですか」と、先生は多少急ぎ氣味で矢繼早やに問ふ。ベルが鳴り出しさうであるから。

生徒達は、デフォーはクルーソー其の人であるとのみ思ひ込んでゐたのに、さうでないと聞かされて、失望の色を浮べてゐる。先生はそれを見てとつて、すかさず、

「こんな事實其の儘といつたやうな書物を、デフォーが何うして書いたかといふことは、此の次の研究問題にしませう。ただ一つ皆さんに話して置かねばならぬことは、デフォーは此の地方の生んだ偉人の一人であるといふことと、私は彼はロビンソンクルーソーをストークニユールで書いたと信じてゐることでありませう」。

編者曰く、我が國でも、兒童の生活に關した文學といふ聲が非常に高くなつて誠に結構なところと思ふが、兎もすると其の生活は甚だ範圍の狭いものに限られてゆく弊がある。つつしまねばならぬと思ふ。我が國の兒童文學の發達は、まだ日が浅いので、大作も少いことと思ふ。西洋には、世界的に有名なものもあるから、譯本を精選して、なるべく多くに親しめさせたいものである。又、近頃は、我が國の少年少女雜誌にも、だん／＼冒險譚が數多くなる傾きがある中には穩健なものもあるが、随分激越なものもある。兒童の柔らかい頭腦を病的に興奮せしめる冒險は、つつしまねばならぬと思ふ。

八 讀書の指導

八私は本日特に好奇心を懷いて教室を覗く、此の前に覗いてから、どんな變化があるかを知らいたために。

生徒は隨意讀書の最中である。私と話してゐた先生は、突然生徒の方を向いて、「パインズ、君が今読んでゐる其の書物を持つて来てご覽」。

パインズは書物持つ手をふるはしながらやつて来る。書物は探偵ものに見本ともいふべきものである。何物かを豫期した衆目は、期せずしてパインズに集まる。パインズは耳朶まで赤くなつてゐる。可愛相に、とても留置位ではすむまいとは、誰しも直感したところである。先生はパインズの震はしてゐる手から書物を受けとつて、ケバ／＼した表装を眺め、血腥い書名に眉をひそめ、ところ／＼拾ひ讀みして、

「どうです、此の本は、面白いですか。」

パインズは餘りに豫期に反した問ひに、呆氣にとられて啞者のやうに黙りこくつてゐる。兎もすると、先生は探偵ものが好きなのではあるまいか。マサカそんなことと思ひながら、吃りつつ、

「ハイ、と非常に興奮させます」。

「讀んでしまつたら私に貸して下さい。私も一つ讀んで見ませう。何んといふ本でしたかね。」

血塗れの徒黨！ フームー！ ほかに之れを讀んだ人がありますか？」
 級の驚きは絶頂に達する。先生が生徒と共に探偵小説を讀むなんて、とても考へられぬ
 事件である。併し讀まれるのは確かなことで、もはや疑を入れる餘地はない。兎に角、面白
 なつてきたとも思つたのか、十人位手を擧げる。

『よろしい。私が讀んでしまつたら、皆さんのすべてに讀んで貰ひたいものです。翌週の文法
 の時間に文法をやめて此の本について十分研究して見ませう。』

級の者は喜んで、忍び笑ひして居る。先生はそれを感じて居る。

『私は餘つた時間に、さきの話のあとを參觀者にお話したいと思ひます。それで皆さんは獨り
 で學習するのです。一生懸命に學習して下さい。私は巡查でもなければ、又其の間は先生でも
 ありません。自分で八三ページをあけて、暗誦する詩を抜き出して、暗誦して見なさい。別に
 六かしいことはないでせう。何か質問することがありますか。』

生徒達はすべて仕事に着手したとき、先生は私の方に来て、

『早くゆきました。私は之れを待つてゐたのです。之れが讀書善導の第一歩なのです。善良

な文學的作品を味ふ正しい道程に第一歩を踏み入れたのです。新しく受け持つた級を導くには
 彼等は何に最も興味を持つてゐるかを見つけて、其處から出發せねばならないと思ひます。頭
 から吐りつけければ、隠れて讀むことを奨励するので、却て傳播力が強いと思ひます。』

私は之れをきいて、「英蘭土に於ける國語教育」といふ名高い報告書を讀んだときに感じた文
 句を想ひ起す。

……先生は教育的効果の永續を欲するならば、兒童の最も興味を持つてゐるものから出發
 せねばならぬ。彼等の愛讀してゐるものは、よしやつまらぬものであるにしても、彼等の讀
 まうと欲する心は尊いものである。彼等の讀みものがつまらない故を以て、是が非にも擁ぎ
 とるのは、往々此の尊い心までもむしりとりことになる……

私は翌週參觀にあがつてもよろしいでせうかと、たづねてみる。

『よろしくご座いますとも。併しどこまで運べるかわかりませんが、それさへご承知ならお
 出で下さい』と、先生は謙遜せられる。

生徒は正しい道を進むであらうか。先生は生徒の方向を轉換することに失敗はすまいか、といふやうな好奇心を懐きながら、再び教室を覗く。

課業は既に始まつて居る。熱烈と敏感は教室に漲つて居る。石像のやうに冷く、寢不足のやうにキョトンとして居る例の少年も、今日ばかりは目も光り顔も生きくして居る。此の少年は、見かけは薄のろいやうであるが、探偵ものの大の熱心家で、探偵的想像力の持ち主であると云はれて居る。

本日の主人公であるパーンスは話して居る。書物を持つた手をブルブルふるはしながら、トボくと先生の前に來た此の前のパーンスとは、全く別人のやうな感じがする。

「先生、最も感激せしめる部分は、探偵のディックブラッドハウンドが、水が首までのほつて來た丁度其の時、地下室から逃げ出す場面であります。」

「さうです、先生、強盜殺人の血塗れ徒黨が、自動車を止めてディックを捕へて、地下室の柱

に綱で縛りつけて、水道の大栓を抜き放つた、あの場面です」と、他の者は附け加へる。

「非常に興奮せしめるところですね」と、先生は答へる。多少冷然とした態度が見える。

「そして、それからディックは押上窓を抜けて這ひあがり、徒黨の頭目か、ディックを救ひに來た女傑の、ローズダーリングを嚇しつけてゐるところを見つけだせう。でなかつたですか」と、先生は生徒をそそりたてる。

「さうでした、先生」と、生徒達は齶唱する。今までは多少先生を敬遠してゐる氣味のあつた生徒達も、今では胸襟を開き温い氣持で先生を包んで居る。先生はもう大丈夫と見てとつたかそろ／＼と奥の手を出し始める。

「一つの事件が起ると、きまり切つたやうに、牢獄に落ち、危いところで助かるやうになるがこんなことは自然であると思ひますか」更に言葉をついで、

「ディックが地下室から逃れることにしてもです、水が首まで届き、今少しで窒息するところで逃げ出さずに、何ゼモット前に逃げ出さないものでせうか。」

「しつかりと縛られてゐて、綱が解けないからです」と、熱心な聴手の一人は叫ぶ。

「さうですか。それならティックは、綱の結び目が水に浸つてから解いたのですね、さうでありませんか」。

「さうなんです、先生」と、讚嘆したやうに齊唱する。

「フォーム」と、先生はつぶやき、「皆さんは、結んだ綱は水に漬かると、何うなるか知つてゐますか。いつかそんな経験をしたことがありますか」。

大抵の者は其の経験をして居る。そして却つて解けなくなることを知つて居るから、何んだか辻褄があはなくなつてきたので、少し不安な氣持になる。先生は此處ぞといはんばかりに、特に力を入れて、こんな不合理なことは普通の物語にもない。全く滑稽なことである。若しデイツクは水に漬からぬ間に解けないならば、水に漬かると猶ほ解けない筈でないでせうかと、先生は駄目を押す。すべての者の顔に明らかに疑惑の色が讀める。先生は更に話を進めて、次から次へと事實不可能である例を拾ひあけて、探偵ものの缺點を暗示する。パランスは自分の疑ひを打ち拂ふが如く、

「でも、良い書物といはれるものにも、不合理なことはないでせうか、先生」。

「良い書物でもと言はれたやうですね」と、先生はズルクつき込み、「君は血塗れの徒黨を良い書物といふのでせう」と、言ひ足す。

「私は大人の讀むやうな六かしい書物にでもといふ意味でいつたのです」と、苦しい言ひわけをする。

「さうでしたか。實際良書といはれるものは、實際生活に於て實際有り得ることが書いてあるものです。假令、實際其の通りのがなかつたにしても、事實有り得ると思はれるものを書くものです。併し、血塗れ徒黨もさうであると思ひますか」。

生徒達はだん／＼先生の意見に従ふやうになり、これも事實に合はない、あれもさうであると續々指摘する。先生も手當り次第にページをあけて讀みあけては、人の好奇心を強く刺戟しようとして、不合理な記述を矢鱈にして居ることを證明するので、生徒達は全然先生の思ふ壺にはまつてゆく。ベルが鳴つたので、先生は

「大體おわかりになつたでせう。私はここに血塗れの徒黨でない、外の探偵ものを持つてゐます。皆さんに一冊あて貸してあげませう。之れには不合理なものはありません。閑暇なとき」

讀んで見て下さい。併し受業時間中には閑暇な時間はありませぬよ」と、いつて、先生は有名な寶玉叢書會社から出版した、所謂善良な探偵ものを分配する。

第三回目の教室覗きをする。討議は秩序正しく順當に行はれて居る。討議は辯舌のよい練習を兼ねたものである。一人の生徒は、

「寶玉集は誠に良いお噺で、事實ありさうもないことは一つも書いてありませぬが、噺は餘り短いので物足らぬ感じがします」と、話して居る。右隣に坐つて居る生徒は、

「私もさう思ひます。そしてもつと良い挿繪が這入つて居るとよいと思ひます」と、附け加へる。先生は

「サアたつた四ベンスしかしないものに、そんなに長い噺や良い挿繪は望まれませうか」。

寶玉集について、色々な批評や註文が出る。

「……………活字が細かすぎて、明るい處でなくては讀めませぬ……………色表紙はケバ／＼してゐて

下品です……………普通の裝釘にして、もつと厚い表紙にしたら美しくなるだらうと思ひます……………」。

先生は色々と有益な注意を與へる。最後に、

「誰でも刺戟の強いものを好みます。併しそれは健全なことを書き、眞を寫したものでなくてはなりません。誰か寶の島を讀んだ人はありませんか。之れは皆さんが讀まれた寶玉叢書よりも、噺も長いし、印刷もよいし、挿繪も澤山あります」。二三人手を擧げる。

「私は二年前に買ひましたけれども、餘り面白くありませんでした」。

「今讀んでみたら屹度面白く感ぜられると思ひます。二年前では、あなたはあの書物を讀むにまだ若すぎたのです。私はここに寶の島を持つてゐますが、面白い部分を讀んで見ませうか」。

生徒達は異口同音に讀んで下さいと願ふ。一度讀んだ者は、先生は何處を讀まれるかの察しは、大低ついて居る。先生は讀みあけられる。或は緩く或は急に、或は高く或は低く、話は正に佳境の絶頂に達したときに丁度ベルが鳴る。之れは偶然であつたであらうか、故意であつたであらうか？それは兎に角、先生は本を借りたい者はと問はれたとき、すべての者が勢よく舉手したのは事實である。

編者曰く、我が國では、中學校や小學校は上級學校の入學試験準備で、教科書か或はそれに近いものに没頭して居るが、女學校になると、入學試験もなく、それに學科が平易なので、頭の少しよい者は、文學的作品を亂讀する傾きが漸次高まつて來る。學校では普通生徒圖書室に、賢母良妻美譚、家政育兒の卷といふやうなものを備へて、之が閱讀を勸奨して居るけれども、ますます隠れてクダラヌ小説に讀み耽る傾きがないでもない。クダラヌ小説を教室で取り扱ふのは、教室の神聖を汚すといふ人もあるが、放つておけば人間の子を殺すことになる。敵の刃を以て敵を制することの、却て有効であることも考へて見ねばならぬ。

九 文法の時間

幸か不幸か、今日は十分間ほどづつ、續けざまに數教室を覗く。すべて文法である。私ども學生時代には、文法は大嫌ひで、文法の時間になると、死んだやうになつたものであつた。今

の生徒達は何んなであらうかと、好奇心を持つて教室に這入つてゆく。

『文法を好きな人は手をあけてご覧』。一人か二人ほどこしか手をあけて居らぬ。其の手も見えるか見かえぬ位の高さである。先生は新任なので、文法に對する生徒の感じや知識を調べて見るのらしい。

『澤山ありませんね。どうして好かないのでせう。實際役に立たないからでせうか。兎に角、普通、文法は如何なる効果があるものとされてゐますか』と、先生は愉快さうに問ふて居る。

『文法は誤のない話をするやうにしてください。』

『それは實際ですか。あなたは今誤りのない話をしましたが、それは文法を習つたからですか。皆さんは何う思ひますか』。

沈黙して居る。何んだか落ちつきのない面白味のない、鈍い空氣が漲つて居る。

『私は、文法は誤りのない話の助けに、そんなになるものとは思ひませぬ。私共は文字で書いた文法を學んだから、誤りなく話せるのでなくて、文法を學ばぬ一般人と同じやうに、耳文法と口調文法で話して居るのです。耳できいて感じがよく、口でいふて調子がよよいやうに話

して居るのです。誤つた話をするのは、文法を知らないからでなくて、正しく話すやうに注意しないからであると思ひます。』

『でも、文法は私共は間違つた言葉をつかつたときに、それは間違つて居るといふことを證明してくれます。』

『よろしい。文法の最も大なる効果は、其の言葉違ひは何故に間違つて居るかといふ理由を與へてくれることであらうと思ひます』と、先生は賛成の意を述べる。

『私は今朝、運動場を通りすぎて居ると、甲はズット向ふの方に居るのに、'Here! you done go! オーイ、やつたな!'と叫ぶと、乙は'No, I never! ムにや!'と叫びかへして居る。此の言葉違ひに、文法上間違つて居るところがあるでせう。きて直してご覧、ウキルソン』と、かく叫んだ當の本人を指名する。

ウキルソンは直ぐ出ていつて、'Here! you dit it.'とやる。

『君はなぜ今朝此の通り言はなかつたのか』と、問ひつめる。『先生が誰も聞いて居られぬと思つたから、いつも言ひ慣れて居る言葉が、自然に出てきたのであらうが、斯う直した方が何

うして正しいのですか』と、先生は文法上の説明を望んで居る。

『先生、私は正しくいふことを知つてゐたのです。何うして正しいつて、それや常識ですぐわかります。HereのHを略するのは、文法はづれではありません。ロンドン兒はあんなときはdoneといふ習慣を持つて居るのです』と、文法上の理由をそちのけにして、耳文法や口調文法を述べて居る。

先生は文法上の過去分詞の用法を問答し、swim や sink のやうな生徒の誤り易いものについて、彼等が日常用ひて居る實際の例をあげて、文法上の練習をなすので、生徒は面白く笑ひながら學習して居る。文法も文法的例によらず、生徒の不斷つかつて居る生きた例によると、非常に興味を以て學習するものである。此のやうな例を豊富に集めて居る教師の熱に感心して教室を出る。

教師の引いた例の中に、次ぎのやうな面白いものがある。

中部英國の或る小學校に、奇妙な癖のついた生徒達があつた。putの過去分詞は、現在及び過去と同じ形の put であるのに、此の生徒達はいつても、puttan といふわるい癖がある。先生は之れを直す

のに、非常に骨を折つて、とうとう成功した。ところが或る日、生徒達は自作文の相互訂正をしてゐた時、級長は勢ひよく手を舉げて、先生をよんで居る。

「何んですか」

「先生またありました」

「何がですか」

「putten ではありません。ナルツアースさんは、put を putten としなければならぬ。putten を

put して居られます」

“I please, sir,” answered the boy, “Chivers has put ‘putten’ where he ought to have

putten ‘put’!”

.....

教室に這入つたときは、學習は可なり進んで居る。一生は立つて主語の意義を述べて居る。『主語とは私共は話して居るものをいひます』

「さうです。併し、此の文を見てご覧。私共の話して居るものは何んですか」と、先生は黒板に、メンドリは卵を生む。といふ文章を書く。

「メンドリであります」と、出来のよい少女は答へる。

「メンドリのことばかり話してゐますか」と、先生は旨く問ひかける。

「卵もです」と、瘠せぎすの少年はつけ足す。

「さうです、メンドリと卵のことを話してゐます。それならどれが主語でせうか。能く考へてご覧」

先にメンドリでありますといつた少女は、又メンドリであると答へたので、先生はすかさず其の理由を求めらる。少女はどきまぎして居るので、先生は言葉やさしく、

「シツスイ、落ちついて能く考へて言ひなさい」と、なだめる。

「先生、メンドリは話の最初にあります。其の外にメンドリは卵を生むといふ動作をします。動詞の主語は動作者であらねばなりません」

『よろしい。ゴールドン、君が先きに述べた主語の意義を訂正して見なさい』。ゴールドンは立つ

て訂正する。

「主語は話の主體であつて、動詞のあらはして居る動作をするものであります。」
先生は、次に、メンドリは臆病である。といふ補足語づきの文章を板書する。不完全動詞と補足語のことを説明するつもりかも知れない。見ずに次の教室に移つてゆく。

先生は黑板に、

子供は見にくい男を恐がつた。

子供は見にくい顔の男を恐がつた。

の二文を書いて、問答式を巧に用ひて、形容句の意味・構成・用法を明らかにし、練習題によつて知識の確實と活用をはかつて居る普通のやり方である。サツサと出て次の教室を覗く。上學年生である。教科書を持つて居る。遺つたときは、丁度先生が shall と will の誤用について、生徒の注意を喚起して居るところである。

「皆さんの出した作文の中に、此の種の誤用が二つあつた。私は誤用者は氣貧く感ずるかも知れぬから、名はいはない」と、いつたやうな前置で、誤用文を黑板に書さ出して、合同研究を進めて居る。自分達に近い實例なので、熱心に研究して居る態度が見える。

文法の學習について、いろんな意見がある。

- (一) 文法は獨立の一教科とすべきである。
- (二) 文法は論理の一分科とすべきである。

(三) 文法は効果の極めて少ないもので、教科から除くべきである。

私はこれ等のいづれにも賛成できぬ。ドーヴァー・ウイリソン氏が言つて居るやうに、學校で教へる文法は機能文法であるべきもので、形式文法であつてはならないと思つて居る。讀本、作文、談話など彼等が日常して居るものから、適切な例を引き出して、そこから出發して又其處に歸着するやうに構案して行くべきものであると思ふ。在來の文法書のやうに、文法的術語

の送迎に追はれ、特に文法のためにつくつた、文法的短文と、長い文章から引きぬいた生命のない文例について、練習するやうな文法は、効果もなく趣味もなく、宜しく廢すべきものであると思ふ。

編者曰く、我が國の中等學校の先生の中には、未だに文法を知らない、正しい文章はつくれぬと信じて居る人がある。と聞かされた。「正しい文章」といふものの意見の相違にもよる事であるが、マサカそんな先生があらうとも思はれぬ。中古文を正しくつくるには、中古文典に通じて居らねばならぬといふのなら、全く通ぜぬ話でもない。口語文典にしても、習つてわるいことはないが、習つたにしたらところで、假名遣いと送り假名に役立つ位なものであらう。普通教育に於ては、ウイルソン氏の意見の如く、實例について機能的に學習すればよい。そして特別に習ひたい者は、特別に習へばよいと思ふ。

十 裁判の演習

教室に這入つてみると、何んだかいつもよりか違つて居るやうである。生徒達は一度に四五人も話さうとあせつたり、盛んに舉手して打ち振つたりして居る。教室はザワついて居るで、先生は手で生徒を制しながら、

「ちよつと待ちなさい。犯罪については、澤山の例が皆さんから出ました。小さい窃盜から恐ろしい強盜まで、皆之れ犯罪であります。訊問される者は、罪の大小こそあれ、之れ等の罪を犯した者でなくてはなりません。犯罪人になる人がなくては裁判の假設演習をすることは出来ないが、窃盜者になりたい者はありませんか。」

希望者は一人もない。兎に角、ウソにも泥棒になることを好む者のあらう筈はない。又教育上如何に必要であつたにしても、生徒に泥棒の眞似までさせて、裁判を理解させねばならぬ程のものでない。

「先生、もつと上品な犯罪を見つけ出したらよくありませんか。」

「それは不可能です。犯罪に上品なものはありません。皆見にくいものばかりです。」

隅の方に坐つて居る赤ちやけた髪の毛の少女は、

「でも、法廷で裁かれて居る事件のうちには、嚴密に犯罪といはれぬものもありませんでせうか。」

「あります」と、先生は同意し、皆に考へて見るやうに注意する。

教室は急に静かになる。今まで頭をくつつけて、ヒソ／＼話してゐた二人の少年は、バネ仕掛のやうに起立して、

「分りました、先生」と、口を揃へて言ふ。

「いつてご覺。」

「自動車事件の裁判にしたら何うでせう。一人の自轉車乗が、規定外の高速力で、狂走して來た自動車に、ひき倒されて負傷したので、損害賠償を訴へるのです。」

「ナンなら私は狂自動車になつてようご座います」と、丈高の少年が附け足す。

「それはよい思ひつきであると思ふ。スチユワートは運轉手になつてもよいといふ意味なの

でせう。」

「さうです。ブレーク君は、自動車主の山の手の富豪になつてもよいと言つてゐます。そして私は其の運轉手で。」

「皆さんはそれに賛成ですか」と、先生はきいてみる。すべて舉手。

原告はバニスター君に定まる。女子の方から主役が出なくなるので、一少女から、

「自轉車は二人乗にして、妻と一所に乗つてゐたことにしたらどうでせうか」と提言する。

「それではバニスターの妻になりたい人はありませんか」と、先生は何氣なく言つてしまつたので、天井が抜けさうな大きな笑ひ聲が起る。バニスターは恥かしさうに顔を赤らめる。先生は之れはしまつたと氣づいたので、今度は恐ろしく眞面目な顔をして、今一度問ひを繰り返す。誰も申出でがない。そこで先生は、

「それなら、斯うしたら何うです。バニスターは妹と一所に乗つてゐたことに。さうしても別に差し聞へはないでせう。……妹にメーレーがなつたらよいでせう」と、先生は壓しつけるやうに言ふ。メーレーは女子の中で、最も主役になりたがつてゐることを先生は感づいて居た

からである。残りの役は男子にも女子にもすべて割りあてられる。一級三十六人の生徒達は、一人も残らず法庭に於て何かするやうになる。

原告と其妹と辯護人

被告と運轉手と辯護人

十二人の陪審官……善良にして眞實な男子及び女子！

原告及び被告側に各々六人あての證人

裁判書記一人

守衛一人……フットボール競技場で練つた聲の持主

總員三十二人、残りの四人はこんな事件に病的興味を持つて居る傍聽人。

先生は滿場一致で判官となる。先生は兩方に對して最後の注意を與へる。各々自分の役を注意深く仕あけるやうに、自分の證言を正確に記憶するやうに。ベルが鳴る……

翌週再び同じ教室を覗く。生徒達は朝の集會から歸つて來たばかりのところである。机腰掛は法庭に似せて配置してある。證言席あり、辯護人席あり、陪審官席あり、證人席あり、先生の卓子は特に前面中央に据え、特別に大きな椅子が置いてある。生徒達は各々割り當てられた席に着く。先生はまだ來ない。被告と運轉手が似つた服装をして、すまして這入つてきたときは、生徒達のうれしい忍び笑ひは室に漂ふ。守衛は自分の役目を果す機會は之れを逸しては又と來ないかも知れぬと思つたか、一段と聲を高めて「靜かに願ひます」と警告を與へる。忍び笑ひが止まる。守衛の發する再度の靜肅警告と共に、判官は辯護人と書記の先導で這入つて來る。すべて起立する。判官は、被告と運轉手が滑稽な服装をしてすまし込んでゐるのを見て咽までこみあけて來た笑ひを、ウーンと呑み込み、いかめしく一禮して着席する。開庭となり訊問が始まる。

原告の辯護人は、一束の大きな書類を見せびらかして、被告の運轉手の傍若無人な不注意が原告に及ぼした残酷な結果を、滔々と述べ立てる。彼の辯護振りは、理路整然としたもので、又熱烈を極めたものである。原告は當時のことを追想して戰慄して居る。彼の妹はまだ入院中

で出席して居らぬ。辯護人は最後に、陪審官の方を向きながら、

『淑女並に紳士であらせられる陪審官殿、斯の如き平和な市民に危害を加へる我がまよな不注意な人達を、其の儘にさし許してよいものでせうか。私は今後斯様なことを再三再四繰り返さずへして平和な市民に危害を及ぼすことを恐れるが故に、被告に對して十分の賠償を課せられることを至當と信ずるものであります』と、結んで着席する。

證據調べがある。最初に呼び入れられた者は、ジョン・パニスターである。彼は一度喚ばれたけれども來ないので、再び呼ばれる。パニスターは兩眼を繙帯し、手をひかれて、よ／＼と歩いてくる様は見ると可愛相である。彼の辯護人は、此の光景に接した陪審官の表情を熱心に讀みうとして居る。

裁判はズン／＼と進行する。證人は次ぎ／＼によばれる。時刻・場處其他詳細のことまで驚くべきほど能く符合する。其の場處の警戒に當つてゐた巡查、其の時百六番地の窓を拭いてゐた日傭女のチャーヴィス夫人、服務を終へて通りかかつた鐵道看守人、馬肉賣の證言は、何れも、被告側の不注意によつて變事が起つたことに一致する。

ベルが鳴つたので、法廷は嚴かに中止せられ、次ぎの開廷日が定められる。

翌週は少しく遅れて覗く。被告は頑強に原告側の辯護を否定したやうであるが、這入つたときは既に終つてゐた。被告の辯護人は、中々巧妙に原告側の證言の不確實を説いて、被告の有利に導かうと努力して居るが、傍聴の私にでさへ、原告側に大した傷を負はすことは出來ないやうに思はれる。

原告の辯護人は、被告側の證人について一々反對訊問を試みる。

紳士？ のパーシイ・アレークは、自動車免狀を返納すべきであることは言ふまでもない。

彼はホンノ二週間前に、二匹の羊をひき殺し、學生の兩脚を挫傷せしめたと白自して居る。

運轉手のチェームス・スチュワートは、不注意又は制限外速力で自動車を飛ばしたかどで、今迄に十回も科料に處せられたといふ古疵をあばかれて、彼は困つた風をしながら否定する。

辯護人は嚴かに新しい證人を喚ぶ。證人といふのはスチュワートを五度も科料に處した地方判

事である。スチュワートは地方判事が出るとは全くの豫想外であつたので、どきまぎてアツくつぶやいて其の儘黙る。此の間、判官は、事件の起つた場所の地圖を陪審官に渡し、又證人の反証訊問に耳を傾けて居る。

判官は一件書類をとりまとめ、やをら身を起して、陪審官に望むやう、

「原告は、道路の右側にゐたのであつたか否か。自動車は、急速力で間違つた角を廻轉しようとしてゐたのか否か。運轉手の申立は、本當と思ふか否か。若し不注意な點があり、又運轉手の申立は虚言であるとするれば、賠償額はどれ程が相當と思ふかを述べられたい」と。

陪審官は別室に退席する。暫く熟議を凝らした後復席する。先頭の一人は起立して、判官から課せられた疑問に極めて簡単に復命する。

「陪審官は熟議の結果、賠償額を三百パウンド(邦貨約三千圓)と評價致しました」。拍手が法廷に起つたので、判官は嚴かに之れを禁止する。すべて起立する。事件は終結する。再び教室となる。先生は、

「今週の作文は、只今あつた裁判を傍聴した、新聞記者であるとして、新聞社へ發送する報告

文を書くことにしませう。報告文の主眼點は、陪審官が判決までに到着した筋道を簡明有力に書きあらはす點にあることを忘れぬやうにしなさい」。

ベルが鳴ると、先生は私の方を向いて、「面白かつたでせう」と、微笑む。

編者曰く、向ふの小學生は遙に社會常識が進んで居る。それに非常に劇的本能に長けて居ると見えて、何んでも實演して、する者も見る者も随分眞面目であるのに感心する。我が國では裁判を見せることがあるかも知れぬが、試みることは殆んどあるまい。百分一見に如かずは東洋の今日で、西洋の今日は、百見一試に如かずまでに、進んでゐるやうに思はれる。

後篇 學校覗き

一 校 長 拜 命

ジョック・リヴァース氏は、日に焼けた赫ら顔に、微笑みを堪へ、高潔な教育理想を、頭腦一ぱいに漂はせながら、いそくと、クライド區教育委員廳を出て來た。彼は、クライド區の貧民區の、小學校長を拜命したのである。かやうな地位は、鰻登りの榮達を夢みて居る教員達の、努めて避けようとして居る鬼門である。それといふのは、貧民區小學校の仕事は、誠に忙しくて煩しい割合に、生徒の成績はあがらず、其の上に、大校長に榮進する階梯としては、甚だ割のわるいものと思はれて居るからである。それで、利巧な先生達は、教育界の航海中に於ける暗礁として、常に觸らないやうに、警戒をさくゝ怠りないと、いつたやうな地位である。リヴァース氏は、真正銘の正直者で、世の所謂利巧者から、愚直と笑はれるほどの眞面者である。彼にとつては、教職は天職であつて、職業ではない。彼は、生れつきの教師であつて、心底から可憐な貧兒の愛護者である。彼は、今回の大戦亂に参加したとき、共に眠り、共に食ひ、共に戦つた戦友の中で、戦場の露と消えた者の少からずあり、そして、其の大半は、貧兒

の父や兄達であることを知つて居るので、人一倍、貧兒に同情を持つて居る。

彼は、大戦中の墮落生活に於て、戦後の世界改造の夢を夢みてゐる。戦友の死屍の臭氣にとりまかれながら、世界改造の新綱領を考案してゐる。彼の綱領の根本精神は、いふまでもなく、人類愛によつて、地上に天國を建設することである。此の精神の最も有力な維持者である基督教は、も早其の力を持たないことを考へて、彼はつくづく慨かしく感ずる。斯のやうな結果になつたのは、十九世紀の初めに起つた、産業主義の生んだ罪惡であると思ふ。此のために、貧民は生活の困苦に苛まれて、日一日と、良風美俗は頹廢し、品性は墮落し、精力は消耗したのである。衣食足つて禮節を知るは、彼等の習ひであるから、宗教の力も、之れを何うすることも出来ない。彼は、すべてを正しく建て直して、新しい世界をつくらねばならぬと、固く決心して母國に凱旋する。

世故に長けた人達は、彼のやうな理想的な考をきかされると、何とも知れぬ、微笑を鼻頭はなすねに

浮べる。理想主義の俚耳に入りにくいのは、昔も今も大した變りはない。世の實務家は、理想は日常の業務を妨げるのみでなく、社會生活をも、政治生活をも、脅かすものとさへ考へてゐる。たまく理想主義を庇ふ者があると、彼等は當てつけがましく、地上に天國を求めて無一物になつた、青白い顔をしてゐる男を、引合に出すのが常である。なるほど理想郷は、實現されずに終ることも多いが、之れは理想の罪でなくて、實行的精力の足りないためである。理想と實行的精力の相伴ふてゐない事例は少くないが、さればといつて、此の二つは、本質上背合せのものではなく、互に提携すべき性質のものである。實行的精力を缺いた理想は、紙上の空想であつて、此の世に天國を引きおろすことの、到底不可能な夢に過ぎない。彼は、實行の件はない理想の危険も、饒舌の無効も、能く知つて居る。彼は分隊長として、又聯隊副官として、兵士を訓練したとき、理想の根柢に立つて行動すべく教養したので、十字軍のやうな高潔な兵士を得、無敵の獨逸軍を撃破したことも、マルヌの第二會戰に、ルーテンドルフ軍に一大痛手を負はしたことも知つて居る。彼は、巧妙な策戰計劃よりも、寧ろ信念的大活動によつて成功することを體驗して居る。彼は、熱烈な理想家であつて、又篤實な實行者である。

リヴァース氏は、クライド區教育委員廳で、小學校長の辭令を懐にしたので、母を喜ばすべく家路を急ぐ。彼の輕快で力強い歩調は、見るも心地のよいもので、人道擁護者の生きた保證のやうに思はれる。彼の氣高い態度、活動に満ちた四肢、頑丈で優雅な風采は、健康と教養を兼ね備へた、希臘理想の典型である。彼は實に兵士や學生や教師の、否すべての人の羨望の的である。彼の顔は、潔白と熱誠と男らしさの象徴である。明るくて、大きくて美しく澄んだ彼の眼は、何物をも引きつけずには置かない靈力を持つて居る。猜疑・淫蕩・裏切の影は、微塵もない。實に、純潔其の物である。此の世に於ける、最も力強くて尊い純潔其の物である。家に辿りついた彼は、

「お母さんく」と、大きな聲で呼んで居る。

「どうしたんだい、ジョッキヤ」と、白麻布の帽子を白髪頭に冠つて居る母は答へる。

「とうくになりましたよ」。

「何になつたのか」。

「校長に」。

「マア、有難いこつちや、お前は小さい時から、心の美しい、賢い見ぢやつたからかう」。

彼は、喜べる優しい母に飛びついて、感謝の涙を溜めながら、接吻する。

二 學校を見た第一印象

リヴァース氏は、翌日學校を見に出かけることにきめる。翌日といつても、七月一日のことであるから、學校は夏休みで無論職員も生徒も居ない。田舎町のしかも貧民區の學校であるから、固より校舎も設備も、立派なものでないことは、豫期して居たが、實物に接して豫期以上ののに驚く。人集りのする、がやくした場處に、一種異様な臭氣に包まれて建つて居る校舎は、化物でも出さうな、極めて陰氣な恐ろしい貧弱な建築である。率直にいふと、豚小屋そつくりである。學校の周圍は、不潔と臭氣で嘔吐を催すやうな借家で、ぐるりと取り圍まれて居る。彼はむさ苦しくて騒々しいゼルサレムの真ん中に、飛び込んだやうな氣がした。洗足で垢

だらけの主婦さん達は、戸口の石段や舗石道にうよくくして、雑談に耽つて居る。餓えた赤城は、燃えつくやうな聲を張りあげて泣き叫んで居る。此の光景を目のあたり見せつけられた彼は、腹立たしさと憐憫の涙でこつちやにされる。そして、彼は彼が考へてゐる新しい世界を造る事の容易でない事をつくつく感ずる。舗石道を這ひまわつて居る、營養不良な、疥癬だらけな、鰐足した、風を湧かした、結核咳をしてゐる子供を造つた、世紀の罪を改めることは、一朝一夕では逆も来ないと思つて、暗い氣持になる。けれど、それ等の可愛相な子供等は、浮世の艱苦を外にして、キヤツくと笑ひ戯れて居るのを見て、彼は急に明るく感ずる。穢ない足をして、ズダ／＼の着物を着て居る小は、心から嬉しうに歌つて居る。

私の小つちやな指輪を誰にやらう

私の小つちやな指輪を

あの穢いウキトリに

私の小つちやな指輪を誰にやらう

私の小つちやな指輪を

彼は、此の陽気な小娘を見て、灰色した貧民區の光明であると思つた。小娘の陽氣を更に増させるために、彼は、そつと二十錢銀貨を握らせて、スタ／＼と學校の方へ歩いて行く。

あの美しいトムミーに

校舎は固より貧弱なものであるが、それにも増して、門衛の無精と横柄と垢光りの着物は、痛く彼の氣をわるくする。門の内側を掃いて居る門衛は、一掃毎に、門前に遊んで居る子供を口きたなく叱りつけて居る。「餓鬼共め、又來あがつてケツかる。早く失せないと棒だぞ」。之れをきいた彼は、落ちついた態度で、

「君、本當に棒が要るのか」と、靜かにきいて見る。

「君は一體何者だい、餘計な口をきいて貰ふまい、君の關係したこつちやないからな」。

「只今は關係しないが、休暇明けから關係する。君が今のやうに、生徒達に野鄙な言葉を使ふのなら、君の所持品を仕末して貰ふかも知れない」。

「そんな謙しいことを仰つしやるあなたは、どなたですか、きかせて下さい。でないと、私の役目として、門内にお入れ申すわけにはゆきませぬ」と、急に言葉が丁寧になる。「私は、新任校長です」と、彼は口もとに微笑を浮かべながら答へる。門衛は之れをきいて急に腰を低くし、馬鹿丁寧な言葉に換へる。下に威張り散らす者は、上にペコペコするのが古今東西にわたつて同じと見える。彼は子供のやうに順従となり、校舎の戸を開いて一々丁寧に案内する。

新校長は獨りで、教室内を見まわる。彼は今までに澤山な學校を觀たが、こんなのは今が初めてである。大きな建築といへば、牢屋か、勞役所か、收容所位の時代に生れた田舎大工が、設計した校舎であらう。古ぼけた、微臭い、不潔な蜘蛛の巣だらけな、薄暗い陰氣な、壓へつけられるやうな、妙な氣持になる校舎である。大教育家のアーノルドでも、發狂して自殺する氣になるやうな、變な臭ひがする。机や腰掛は壊れて、古くて、古新聞紙が一ぱい詰まつて居

る。古新聞紙をのけて見ると、パン屑や、心のない鉛筆や、紐切や、錆小刀などが出てくる。塵埃だらけの雜記帳を開いて見ると、亂雑に書き散らし、間違つた運算も、其のまゝになつて居る。彼は、此の先生は、屹度よくない方であると直感する。先生の卓子が片隅にあつたので、抽出をあげて見る。屑籠のやうに、何もかもごつちやに詰め込んである。手紙の讀み散らしや、書き散らしの中に、佛蘭西ものゝ人情小説や、ワイルドの牢獄物語詩がある。口栓が幾つもあるので、底の方を掻きまわして見ると、ウキスキーの空瓶が寝ころんで居る。彼は嘆息を漏らして、次の教室へ行く。

前のは見違へる位に清潔な教室である。机も腰掛も、キッチンと整頓してある。教科書は、紐で括つて、番號と書名と冊數を書いたカードをつけて、正しく積み重ねてある（教科書は、貸與又は給與するのが普通である）。黒板は、奇麗に拭きとつてある。掃除用具は、隅の方に片づけてある。チョークは、箱の中に行儀正しく揃へてある。児童の石盤は、拭つて漆のやうに黒い。紙屑は、何處にも見當らぬ。教師の卓子の一隅には、枯れ萎んで居るが、百合の花束をさした花瓶が置かれてある。他の隅には、児童の綴方帳が山積みになつて居る。彼は一冊を手

に取つて讀んで見る。

此の前の土曜日に私共の先生は、グレンの野遊びに私達を招いて下さいました。面白く一日を暮らしました。馬車に乗りました。ハムクローズを通つてゆくとき、小さな犬の兒が猫に噛みついて、猫は小犬の鼻柱をひつかいてゐました。それから、酔つたくれが、店頭の卵箱の上にアツ倒れて、顔を黄味だらけにして居ました。小叔母さんに叱りつけられてゐたので、吹き出さずには居れませんでした。大層熱い日でしたので、馬は喘ぎながら車を曳いてゐるし、居眠りして居る人もあるし、寝をべつて居る人もありました。私共は、とうとうグレンに着きました。そして、ふつくらしたお饅頭と、おいしい餡パンと、ラムネを戴きました。先生は自分でみんな拂つて下さいました。大層親切な先生で、私共は卒業するまでお習ひしたいと願つて居ります。

私共は、繩飛びをして面白く遊びました。之れが私の繩飛びをして居る繪であります。(繪は省略)

彼は満面に微笑を堪へて、此の室を出る。さう失望するまでのこともない。生徒のために、

楽しい土曜の休日を、犠牲にするやうな教師もあるのだからと、考へながら、次の教室に入つてゆく。

紙屑や、練習帳や、色のさめた三色筆や。雛菊もある。手垢のついた、書入れの多いコンラッド、スチアンソン、ブラウンング、テニスなどの詩集もある。彼はどの教師によかれあしかれ特徴があると思つた。最後に這入つていつたのは、校長室である。戸欄や卓子は、荷造のために掻きまわされてある。寫眞や、原稿の書き損ひや、色のさめた花束も散らばつて居る。恩給を貰つて退隠した前校長は、誠に好人物であつたらしい。生徒をひどく甘やかして置いたと見えて、教室には紙屑や雑誌帳は可なり亂雑になつて居る。教師にも極度の自由を與へてゐたと見えて、或者は怠け放題に怠け、或者は生徒のために獻身的努力をなし、或者は自分の好きな文藝に耽つてゐる。彼は前校長の長所と短所を悉く知り得たやうな氣がして、今後自分の採るべき方針について考へながら、歸路につく。

三 職を賭しての請求

校門を入つて来る新校長の姿を見た門衛は、あたふたと出て来て、丁寧と尊敬を取り交ぜた態度で、お辭儀をする。門衛は、今日は此の前とは違つて、胡麻鹽鬚をきれいに剃り、清潔した折目の正しいズボンにはき換へて居る。リヴァース氏は、之れに氣づいたが、別に興味も起らず、普通の如く答禮して、校舎内を一巡し、スタ／＼と出てゆく。彼は、電車で市中に出かけるのである。電車に揺られながら考へに耽つて居る。

「……………どうしても校舎を美しく明るくして、職員生徒の氣分を一新し、學校の空氣を清新にせねばならぬ。之れだけは、どんなことがあつてもせねばならぬ。こんな陰氣な校舎で、職員生徒に多大の要求をするのは、要求する者の間違である。……………貧民區でない場處の學校なら校長も父母も、こんな不衛生極まる、幼弱者の心身を食ひ枯らすやうな校舎は、一日も其のままにして置くまい。……………あんな薄暗い、不潔な通風のわるい校舎に入れておくのは、病氣や罪惡の萌芽を培つて居るやうなものである。家では、豚小屋のやうな狭苦しい穢い室で眠り、腹一ぱい旨いものを食べたことのない彼等貧兒、遺傳的にも好ましくない素質を少からず稟けて居る彼等貧兒は、普通兒に比して割のわるい重荷を負ふて居るのである。せめて、校舎だけ

でも、人並らしいものにしてやらねばならぬ。……………貧民區の學校は、貧兒の天國たらしめて彼等のわるい境遇と遺傳に打ち勝たしめるやうにすることは、何よりも大切である……………」と、繰り返しく考へながら、彼は教育委員中の最もわかつて居る、氣骨のあるといはれて居る、ワレース・ウエーン氏を説き落すべく市中に出かけて行くのである。

「絶望です、リヴァース君、全く絶望です」と、ワレース氏は、其の日の午後には告げる。

「君の要求に従ふと、少くとも七千圓から壹萬圓はかゝるでせう。何事も節約々々の現在の財政方針ですから、それに御存知の通り、民衆は戦時から引き續いてゐる重税に大反對してゐます、特に教育税の急に重くなつたのに。勿論私一個の意見としては、教育税に反對するなんて、探るに足らぬ愚見と思つて居ますが、一般民衆は、フィッシャー文相の教育案は、無法であると非難して居る。私はあの案は、戦前に無法に少かつた教育費を、他と同じ率に引きあげたに過ぎないものと考へて居る者です。議會は露西亞に十億圓、中央亞細亞に十五億圓、コン

スタンチキスブルに二億五千萬圓を投することを決議して居る。こんな不生産的なことに、莫大の経費を棄てて居ながら、百年の計をなす教育のためには何うでせう。縮減々々、器械標本もロクに買へず、豚小屋のやうな校舎も、緩くつて間に合せねばならぬとは、何といふ馬鹿氣たこととせう。兎も角、斯様なわけですから、何とか御辛抱を願。なくては逆も駄目です。」

「でありませうが、ウエーンさん、今申しあげたことだけは、どんなことがありましても、是非聞き届けて貰はねばなりません」と、彼は頑として動かさない。

「リヴァース君、私は君が強く主張せられるのは、尤もと思ひます。校長は、當局者を根氣よく攻めつけて、目的を達し得ることも能く知つて居ます。あの公共團體の仕事を食べものにして居る、卑劣な請負師が居らなかつたなら、随分立派な設備も出来、堅牢な校舎も出来たであらうに。本當に莫大の金銭が、學校のために費やされるのです。建築術も進歩したのですから、校舎も半永久的に建てられねばならぬのに、公共團體の建築物の平均年齢は、僅かに四十年に過ぎないとは、實に情けないことではありませんか」と、訴へるが如く、同情を求めめるが如く説明する。

「デモ、私は何とかして貰はねば」と、リヴァース氏は、特に力を込めて言ひ切る。

「それでは、私は君にお勧めします。秘書官にお會ひなさい。彼は有爲な校長に對しては、決して無情な男ではありません。彼は屹度、何とか目鼻をつけてくれるでせう。若しも出来ぬと言ひ切つたならば、切札を用ひなさい。」

「切札とは？」

「最後の手段です、辭職です」。リヴァース氏は固より其の覺悟で來て居るのだから、辭職と聞かされても別に驚きもしない。

秘書官のドン・ブラック氏は、「氣轉」といふ語が大好きだと見えて、之れをカード書にいて寢臺の眞上の天井にも、湯殿の壁にも、ピンでとめてある。役所の委見にも浮き出している。自分の卓子には、箆め込み裝飾にして置いてある。彼は、「氣轉」は委員達を操縦するに、大切な心掛であることを承知して居る。區内の澤山な先生方の好評を博するにも、時には、又、社

會の福利のために、老若朽教員に、喜んで依頼退職させて、有爲の教師と取り換へるにも、大切なものであることを能く心得て居る。斯やうな語を、モットーとして居るブラック氏は、リヴァース氏が、教育的見地から、校舎の清潔・塗替・裝飾についての陳述を、忍耐して聞き終つた後、

「お氣の毒ですが、リヴァース君、それは尠もだめだとあきらめて貰ひたい。君はさぞ心苦しい事でせうが、斯ういふ私は、更に心苦しい思ひをして居ることをお察し下さい。私は、君の要求を無理と思ふ者ではない。君の教育上の理由には、心から賛同して居る一人であるが、何といつても、斯う經濟がギリ／＼まで押し詰つて居る現状では、手も足も出ないのです。今に餘裕が出来たら眞先に君の要求をかなへるつもりです」。

「さう致しますと、今申されたことは、考へ直して貰ふ餘地のない、最後のお言葉でありますか」。

「お氣の毒ですが、誠にお氣の毒ですが、左様です」。

「それなら致し方ありません。私は辭職致します」と、リヴァース氏は、率直に言ひ残して

立去らうとする。

「マア／＼お待ちなさい。もう少し話さうではありませんか」。

「いや、此の上いくらお話したつて無益です。私は辭職して此の顛末を、新聞に公表した方がよいと思ひます。それは、あなたを困らすためではありません。さうした方が、却てあなたが委員會に於て、私の要求を貫徹するに都合がよく、其のために可憐な貧兒は生きがへると思ひますから」。

「君はなか／＼手硬い方ですなア」と、秘書官は、微笑みながら、腰かけるやうに勸めるので、リヴァース氏も微笑みながら勸めに従ふ。

「私は君のやうな有爲な教育者と、言ひ争ひをしないのを主義として居る。それといふのは私は区内から有爲な教育者を一人でも失はないやうに、極力努めて居るからである。リヴァース君、私は君をもつと立派な學校に行つて貰ふことが出来るのですが、如何でせうか」。

「いや、それは御免を蒙ります」と、言下に斷はる。やゝ暫く考へて、

「それまでに申して下さるなら、私は交換條件を持ち出させよう。私の要求通りを請負師に

させると、少くとも萬の金ばかりです、私はそんな莫大な金を要求しませぬ。たつた壹千圓だけ貰へばよろしいのです。壹千圓は綠色繪具と、假漆と、白色塗料と、刷毛と、歴史書（長押の中間に飾める）の代金です」。

「エー、ア、さうく、それでは文房具屋と看板屋の仕事ですな」。

「補綴師の仕事とおよびになつても構いませんが、兎に角、私にそれ等の材料を下さい」と、リヴァース氏はにこくする。

「あげませう、シテ、君はそれで何うするつもりですか」。

「校舎をきれいに」。

「君自身で」。

「いけませんか、よろしいでせう。私にお任せ下さい。材料は明朝お貰ひ出来ませうか」。

「どうも、肉迫的突撃ですな。よろしい、承知しました。リヴァース君、私は之れから委員會に諮つて見ます。屹度賛成してくれるでせう、君が辭職する決心であることを話せば。材料は明朝正午までに、學校に届けさせます。私は忙しいですから之れで失禮します」。

「左様なら、有難う御座いました」と、リヴァース氏は心から感謝する。
 「何う致しまして、別にお禮の言葉を戴くほどのことも致しませんのです。それはさうと、リヴァース君、私は學校長が夏休みも休まず、自分で校舎を清潔裝飾することは生れて始めて知つた事實です」。

四 汗水たらして校舎修理

翌日の正午に、運送馬車が、タッフ街小學校の門前にとまる。新校長と門衛と御者は、荷物をおろして學校に運ぶ。門衛のテレンス・ムルリガンは、之れまでは怠け者の横着物であつたが、新校長に對しては、打つて變つたやうな働き手となる。彼は最初の第一日から、新校長の威厳と人格に、すっかり感心して仕舞ふ。彼は新校長は、誠に親切で熱情家であることも知つた。リヴァース氏は、愈々仕事を始めやうとしたが、足場に困つた。それを見てとつた門衛は、かねて近しくして居る建築師の仕事場から、早速と必要なものだけを調べて来る。次に困つたのは、刷毛の使ひ方に慣れた者を五・六人備ひたいことである。それもテレンス門衛は、

労働紹介所について、熟練した廣告ビラ張りを六人傭つて来る。門衛は愛蘭人の血を受けてるので、封建的氣質を有し、長上を尊敬する精神を多分に持つて居る。若し上に立つ者が、人情美に富んで居る人なら、彼は喜んで身命を捧げる氣質を窺いついで居る。

リヴァース新校長とテレンス門衛は、私交上に於ては友達の如く睦まじく、形式がましい事はすべて取り去り、古びた木製のパイプを口にくはへ、スバリ／＼と吹かしながら、共に天井を塗り、壁を塗り、假漆^{ヒヤシ}を使ひ、裝飾に餘念もない。黒い穢い天井は、忽ちの間に白く明るくなり、泥土色^{ドット}した黴菌の果^ミくつて居た壁は、緑色塗料のお蔭で、柔かい滑かな氣持を與へるやうになる。教室の腰板は、胡桃色の暗色に塗られたので、落ちついた色調をあらはし、戸も卓子も戸棚も同じ色の假漆で塗られる。床板は消毒液で擦り、乾いたとき蠟を淡く流し、羅紗で巻いた重い鐵棒で磨きをかける。此のやり方は、日傭掃除婦が不潔な水で板を洗ひ流すよりも遙に衛生的である（我が國の床板のやうに、汚水で拭ひたて、黒光りをして居るのは、非衛生も甚しいものといはねばならぬ）。此のやうに蠟を床板に浸み込ませて磨いて置くと、掃除婦はお湯一杯と、清潔な羅紗の掃除具さへあれば、容易く迅速に床上の塵埃を拭ひ取ることが出来る。

る。従来のやうに掃除具に水をつけてゴス／＼と擦り拭ひする面倒が省ける。之れを要するに生徒には衛生的で、掃除婦には時間と勞力の經濟になる。

教室をきれいにしたので校長は、長押の中層に嵌める童話や沙翁ものや歴史ものを取り扱つた繪巻物を買ひにゆく。大抵の學校では、つまらぬ畫家の書いたものを數百金を抛つて買ふのが普通であるが、リヴァース氏は有名な大家の書いた石盤畫を、一尺五拾錢の割合で買つてくる。門衛に手傳つて貰つて、之れを長押の中層に嵌め込み、周圍に氣のきいた縁紙を貼つて額^カのやうにする。繪巻物の表面に假漆を塗る。假漆が乾くと艶々するので、塵埃がたまつてドス黒くなる心配はない。繪巻物の大部分は上品な諧謔に富んだもので、觀る者をして笑と幻の國に遊ばしめる。貧民區の子供は、朝から晩まで、尖つた小言の聲か、不快な泣き叫び聲をきいて居るのであるから、せめて學校だけでも、嬉しく笑ひ夢想國に遊ばしめて、いやな境遇を忘れさせることは大切である。

講堂は、薄暗い気味のわるい場處であつたが、白ペンキを塗つて、上に假漆を刷き、周圍にはビーター・パンの誘導的物語を描いたので、全く一變する。リヴァース氏は子供が校舎に入ると直ぐ、美と勇と愛の空気に浸らせて、柔らかくて強い印象を與へたいのである。子供は陶冶性に富んで居るから、出来るだけ機會を捕へて、勇敢・眞實・廉恥・高潔の印象を深からしめたいのである。此のことは、わるい境遇と遺傳を持つて居る貧兒には特に大切である。講堂の手入がいよく出来あがつたとき、門衛は出口で立ちどまり、振り向いてデーツと眺めて溜息をついでゐる。之れを見たリヴァース氏は、

「何處かいけないところがあるかね、テレンス君」。

「いや、實に見事なものでゴアス、天國の入口に立つたやうな気がしモス」。

翌日彼等は廊下の方に取りかゝる。壁の上部は白色塗料で、下部の腰板は胡桃色の假漆で塗りかへる。廊下の右側には、素寒貧から倫敦市長まで築きあげた「デック・ホイッチントンと彼の猫」の額木をあらはした彩色畫を掲げる。之は自助と努力の如何によつては、貧兒も立身出世し得るといふ活教訓を與へるためである。左側には、英文學中最も敬虔性に富んだ、パインスの「コツターの十曜日の晩」の繪卷物を掲げる。リヴァース氏の考へでは、子供が各自の教室に入るために、一步校舎に足を踏み入れると、デック・ホイッチントンからは奮闘的生活を、パインスの繪詩からは敬虔的生活の感化を、受け容れさせようとする計劃なのである。

校庭の隅に小舎が建つて居る。パン屑や廉紙の棄場と、子供達の雜談所に用ひられてゐる。

其の雜談も、歴史上の英雄豪傑ではなくて、活動で見た殺人強盜の類である。リヴァース氏は此の小舎も其の儘にして置かず、綺麗に掃除して、外側には英本國の略地圖を畫いて、炭礦地・工業地・小麥地・馬鈴薯地・果實地・貿易港・保養地などを記入する。之れ等の事柄は、教科書に

よつて、二十年もかゝつて、學習するのであるが、それを一目で見得るやうに工夫したのである。他の側には、英國民族の發展進化の歴史圖表を掲げて、數千年の國史上の重要な事柄の縮圖を示す。リヴァース氏の考へでは、地圖によつて現在を明かにし、圖表によつて過去を知り以て將來を暗示し、彼等に前途有望の國に生れた喜びと、今後の覺悟をなさしめたいのである。校庭の中央には五月柱を立て、昔ながらの面白い田舎踊をなし得るやうにする。最後に手をつけたものは、門の傍に掲示板をつくる設備である。之れが出来たので、掲示板に次の文句を書き、校舎修飾の仕事がすつかり終了する。

皆 さん !

小さい親切な行
小さい愛の言葉
此の世を幸福にす
天國のそれのこと

五 寛嚴を兼ねた取扱

新校長は休暇明けの始業日には、八時半に登校する。始業前に生徒を集合せしめる中庭に、高い臺を持ち運び、其の上に蓄音機を据えるやうに、門衛に指圖して校舎に這入つてゆく。各教室には田舎から持つて来たばかりの、生き／＼した美しい草花が飾られてあるのを見て驚く。廊下の彼方から、軽快な靴音がコト／＼と聞えるので、誰であるかを確かめるために、其の方に向つて歩を進める。曲角でバタリと出會つたのは愛くるしい娘で、左手にフランス菊を挿した花瓶を持つてゐる。娘は晴々しい聲で、

『お早う御座います』。
『お早う、ミス……』。
『妾の名は、クキーンで御座います』。
『あなたは此の學校の先生ですか』。
『ハイ』。

「澤山な美しい花を持つて来て下さつたのは、あなたでせう。有難う、さぞ子供達は喜ぶこと
でせう」。

「妾は大層嬉しう御座います。休みに郷里に歸つてゐますと、校舎は不思議な變り方だと
聞きましたので、實は四・五日前にわざ／＼見に参りました。そして、其の變り方のひどい
のに全く驚きました。本當に、之れからは明るい楽しい日がおくれると思ふと、うれしくつて
なりません。以前はゾツとするやうな恐ろしい處でしたので、妾は幾度逃げ出さうと思つたか
わかりません。今はそんな考は少しもありません。いつまでも／＼居たう御座います」。

「有難う、おとまりになつて、此の私をお助け下さるとは、之れからは心も力も合せて、可憐
な子供達のために、楽しく盡しませう」。

感謝の握手を交はして、リヴァース氏は運動場に出てゆく。

運動場には子供達は遊んでゐる。休暇中に起つた學校の變化にびつくりして、八益しく話し

あつて居る。破れ着物を纏うた我鬼大將らしい兒は、一段と高い聲で、小舎に描いてある歴史
畫のステキに美しいことや、五月柱のことや、バスケット・ボールや、其他色々の運動具につ
いて、感嘆的報告をして居る。彼等は實に遊戯に渴き切つて居るのである。此の休みには、海
邊にも林間にも行かれなかつたのである。舗石道は彼等の唯一の遊戯場で又想像の海邊であ
る。薄暗い猫額大の空地は、彼等の想像の林間である。殆んどすべての子供は、營養不良な顔
色をして居る。話して居る言葉は、恐ろしい下品なものであるが、彼等は家庭で聞き慣れ使ひ
慣れて居るから、下品な言葉であることを知らないで、誰の前でも平氣に使つて居る。弱者
密めの悪太郎は、彼處此處で弱者を押し倒したり、憶病者が後生大事に握つて居る、小使錢を
強奪つて居る。大抵の子供は遊戯をしながら、幾度も／＼頭をかき、貧乏ゆすりをして居る。
こんな憐れた貧兒でも、流石は子供である、彼等の想像を逞うせしめる繪紙は好きと見えて、
小舎の歴史畫の前に集つて、有頂天に喜んで居る。そして、あれは何だ之れは誰だと互に譲ら
ず言ひ張つて居る。

リヴァース氏は、時計を見ると九時になつて居るので、門衛に命じて門に鍵をかけさせる。

「生徒も先生も、まだ皆來てゐませんが……」。

「よし、わかつて居る。皆來て居るべき筈なのだから、門をしめなさい」。

門が閉ぢられて鍵がかけられる。新校長は深い考へから斯うさせたのである。彼は呼子笛を鳴らしたので、教師も生徒も集合する。三人の教師と七十五人の生徒は、まだ參集してゐないが、式はズン／＼と進行する。今迄は直に教室に這入つたのであるが、新校長は毎朝聖歌を唱ひ、祈禱を捧げる事にする。今朝の聖歌は「ザ・アウルド・ハンドレッド」である。彼は最初の三行を歌つて、それから蓄音機の針を動かす。靜かな朝の空氣を顔はせて、熱愛と莊嚴の交響樂が廣く高く傳播する。先生も生徒も吸ひつけられたやうに合唱を始める。周圍に建ち並んで居る借家の窓から、急に數百の頭が突き出される。彼等は此の氣高い力強い合唱に、聲を合せて口吟んで居る。道通る人は歩を止め、物賣る人は手をやめて、子供達が清らかな澄んだ天使

のやうな聲張りあけて歌ふ聖歌に、いたく感動し、うな垂れて佇んで居る。

吾れにはほかの隠れ家あらず

たよる方なき此の魂を

ゆだねまつれば御愛くしみの

翼のかけに護り給へね

校長は次に祈禱にうつる。それがすむと、蓄音機は飛び立つやうな愉快な進行曲を鳴らす。子供達は兵隊のやうに勇ましく、雲雀のやうに軽く、教室に繰り込んでいく。子供達は學校に這入ると、廊下も教室も目ざめるばかり美しいのに、驚異の眼をみはる。

學習が始まつたので、門は開かれる。遅刻した三人の教師は、仕方なく門外に立たされて、仕方なく掲示板の文句を讀んでゐた。一人はジョン・サースト君で、抽出の中にウキスキーの空瓶を忍ばせてゐた先生である。今一人は、チャック・グラウス君で、過激派の社會主義者で、

赤いネクタイを締め、垢染みだしたシャツを着、口元に嘲笑を浮べた先生である。他の一人は女子で、少しお人好しの方で、ミリー・スロー嬢である彼等三人は別に恥かしいといふ態度もなく、シヤラリ〜と教室へ歩いて行く。校長は一言もいはず、彼等のなすがままにして置いたが、七十五人の一隊は呼びとめられる。不規律は貧民の常であるから、何うかして之れを矯正しようと思ふ。一人々々呼び出して、遅刻の理由をきいて見る。

家庭の原因……………三十三人

- (一) 赤坊の守をさせられたために……………四人
- (二) 母の病氣のために……………四人
- (三) 寝過ぎたために(昨晩は十一時に寝た)……………四人
- (四) 朝飯を食べないために……………三人
- (五) 睡眠不足のために(昨晩は両親は泥酔して喧嘩)……………十人
- (六) 病氣のために……………五人
- (七) 父の朝飯を仕事場へ持って行つたために……………三人

學校の原因……………四十二人

- (一) 學校が嫌ひですから……………十二人
- (二) グラウス先生を好きませんか……………十人
- (三) サースト先生に吐り飛ばされるので恐ろしいから……………五人
- (四) クキーン先生の受持からサースト先生の受持になつたから十五人

校長は之れ等の遅刻生を、新しく修飾せられた講堂に連れて行つて、十五分間の自由時間を與へる。それから戻つて来て、『新しい學校を好かぬ者は手をあけなさい』と問ふて見たが、一人も舉手する者はない。そこで校長は、更に訓話をしてきかせる。

『皆さんは、それ〜尤もと思はれる遅刻の理由を述べたが、今後は決して遅刻してはならぬ。皆さんの先生方は、皆さんの學習に出来る限りの手助けをしようと、努めて居られるのだから、皆さんも一生懸命に學習せねばならぬ。最もよく出席した者には、金のメダル、次々の者には、銀又は青銅のメダルを與へることになつて居る。來月は海邊に遠足するのであるが一度も遅刻した者は伴れて行かないのです。皆さんの中で、遠足に行きたい者は手を舉げてご

「一人も残らず擧手する。『よろしい、では、私の今いつたことを確とお守りなさい。再び遅刻してはいけませんよ。』と、やさしく強く誠める。彼等は喜悅と堅い決心を面にあらはして、各自の教室へと急ぎ去る。

休憩時にサースト君は校長室によばれる。サースト君は、會見を恐れてゐるためか、落ちつきのない態度で、校長室の戸をあける。

「お早う、サースト君、おかけなさい。私は率直にお話します。第一に、七週間の長い間休みながら、第一日に遅刻するとは、甚だ熱心が足りないと思ひます。何となれば、熱心家は休暇あけを待ち焦れているものです。第二に、君は餘り丈夫相に見えませぬから、職務に努力することは困難であらうと思ひます。第三に、本日の遅刻生中、五人は君を恐れ嫌ひ、十五人は君の級に移ることを好んでいませぬ。こんなことでは、教育の効果を擧げにくいではありませんか。』

「一寸お待ち下さい、あなたは同僚の教師よりも、生徒の言を餘計に信ぜられるのですか」と、むつとした態度で言ふ。

「それは教師によりけりです。十五人の生徒が、一人の教師の受持を離れて、君の受持になるのを好まないのには、何か譯があると思ひます。それはそれとしても、君の受持生徒の成績とクキーン嬢の生徒の成績を比べてみると、比較にならぬほどの差ではありませぬか、君は過度の飲酒のために、職務を遂行するに不適當になられたか、それとも無能力になられたか。何れかであると思ひます。』

「失禮なことを申されますが、あなたが今言はれたことは、責任を以て證據立てられますか」と、サースト氏は力弱い調子で言葉を挟む。

「證據立てられます。若し私の言つたことに不服があるなら、何時でも私は、教育委員達の面前で、君の受持教室に於て、孰れが正しいかを證據立て見せませう」と、自信のある態度で答へる。

「誠に申譯がありません」と、彼は急に折れて哀願する。『此の數年といふものは、私の生活は

眞黒闇なのです。妻は病身者で、二人の子供は肺です。そして私の僅かな俸給で暮らさねばならぬのです。教師になつたのは私の身の破滅でした」と、彼は涙を流さんばかりに物語る。

校長は彼の述懐に深く動かされる。僅かな俸給のために、心身の過勞を招いて居る者の少なからずあることを、彼は能く知つて居る。それに、頭の硬化した視學が、不透明な頑固な尺で計つた報告書を監督官に提出し、教育に理解のない半可通の監督官と共に、新進氣鋭にして倅辭を知らぬ、有爲の教育者を虐待する悲劇も、彼は能く承知して居る。最近にパーナム改正俸給率が採用せられて俸給もよくなり、それに又、教師自身の努力で、自由の範圍も少しは擴張されたので、教師もどうやら人並らしい息をつくことも出来るやうになつたとはいへ、精神的仕事に理解の少い民衆は、民力休養を名として教育費を軽減しようとして居る。

「サースト君、私は君の境遇に同情する一人です。私は誰彼の區別もなく、すべての教師を追ひ拂ふと思つて居る者でない。私は私の職務に全生命を捧げてゐる者です。私は永久に子供達を愛してゐる者です。教職は私にとつては、職業でなくて天職なのです。私共は自分の職務に忠實でなくして、何うして子供達を立派な市民に育てあげることが出来ますか。それとも、私

の言つたことに間違があると思ひますか、サースト君」。

「あなたの仰つしやる通りであります」と、靜かに答へる。

「さうでせう、間違はありますまい。今一言私に言はせてくれ給へ。私は君は生れつきの氣むづかし屋でもなく、又冷酷者でもないと思つて居る。過度の飲酒が、君の神經を尖らし、時に爆發するので、生徒は恐れ嫌つて居るのだと思つて居る。それで、君は君自身のために、家族のために、又受持生徒のために、斷然禁酒する覺悟はありませんか」。

「ハイ、喜んで禁酒致します。もと／＼好きで飲み始めたものではありません」。

「それは結構なことです。見うけるところ、君の健康は餘りよくないやうですから、明日から二週間の暇をあけます。妻子を伴つて海邊でゆつくり保養しなさい。學校のことはすつかり忘れて、健かな身體と強い意志を養ひなさい。そして二週間後に再び此處に歸つてきてくれ給へ。吃度、君は立派な仕事をなし、私の無二の友となつてくれることと信じて居る」。

「けれども、私の級は何うなるのでせうか」。

「そのことは御心配御無用です。私は君に代つて二週間教育しますから」。

「サースト氏は感激に

ふるひ、切れ／＼の言葉で、
 「何ともお禮の申上げやうがありません……有難う御座います……二〇三年早くあなたに御會
 ひ出来ましたなら、どんなに私は幸福でしたであらうに……あなたは高潔な紳士です……私は
 馬鹿者でした……併し、再びは、本當に再びは……」
 彼ははふり落つる涙をこらへつゝ室外に去る。校長は感激の涙をかくすために、傍を向いて
 ハンケチで兩眼を拭ふ。

* * *

「君は僕をよんだのかい」と、合圖もせずに戸をあけて、つか／＼と校長の前に立ち、詰問が
 ましい不遜の態度で、共産主義者のチャック・グラウス君が言ふ。校長は急に向き直り、態度
 を正して、
 「さうです。これからは合圖をして後戸を開けるといふ、日常誰でもする作法を守つて貰ひた
 いものです。そして、校長に對して、當り前の言葉遣をして欲しいものです。君の生徒の面前

では特に」。

「大戦後そんな四角四面な獨逸風は流行りませんからね」と、鋭くやり返す。」

「君は今度の大戦に参加しましたか」。

「否」。

「それで、君が遅刻するのもか知れぬ」。

「汽車が遅れたんです」と、空嘯いて居る。

「七週間の長い間休んだのだから、教育に熱心があるなら、もつと早い汽車に乗つて、學校に
 來たくてたまらぬものと思ふ。今後は九時が五分前に出勤して貰ひます」。

「なるほど、なアーるほど！」と冷笑がましくつぶやいて居る。

「君は教育界に於ける九時四時黨ですか」。

「左様です、僕は九時から四時までの勤務に對する報酬を受けて居るのです。それ以上の勤務
 は餘分なのです」。

「君のいふのは、教育なのですか、それとも又政治なのですか」。

「正義」のです」

「君は善良な作法や規律や能率の増進をそちのけにしても、君の所謂正義に忠實になるのですか」。

「君の此の學校に來ない前は、僕等は木當に幸福な日を送つてゐたよ」。

「さうでせう。自由に怠けることが出來たから」。

「君は先生の好感を買ふやうに努めない」と、評判がわるくなりますよ」。

「君の所謂評判は、學校に於て無政府主義を實施せよといふ意味でせう。君は儘に新しいデモクラシーを求めて居るが、併し君の求めるやうな幸福境は、遅刻したり、傲慢不遜であつたり、九時四時勤務を主張したり、怠け放題に怠けられぬから教職や學校や教育を呪詛したり、鬚も剃らず顔も洗はぬ無精をしたり、生徒に手蟲のやうに嫌はれたりして、それで實現出来るものと思つて居るのですか。君のデモクラシーの理想の實現するには、君のやうな實行の伴はない教師に換へるに、もつと理想實現のために眞剣な態度を持つて居る教育者を以てせねばならぬと信じて居る。私は學校に、愛と親切と熱心を持ち來し、信念と希望と慈悲のために、眞面目

に働く若い社會主義者を喜んで迎へたいと思つてゐる者である」リヴァース氏は、こゝまで話してキツと態度を改め、「卒直に言ふと、私は顔も洗はないやうな無精者、校長に傲慢不遜な態度と言葉遣ひをして得意になつてゐる者、國家人類のために解決せねばならぬ問題は山ほどあるにも關らず、長い休みを怠け暮らすやうな青年は最も嫌ひです。君は、一體、此の後何うしようと思つてゐるのですか」。

「辭職」とつぶやくやうに答へて、うな垂れて居る。

「それは君の探るべき最も男らしい仕方です。明朝、君が九時が五分前に出勤しないならば、辭職願を受領致しませう、左様なら」。

「左様なら、先生」。

彼は翌朝八時四十五分に出勤する。

校長は、ミリー・スロー嬢を喚ばなかつた。彼は女の涙は甚だ以て仕末のわるいものであることを知つてゐたからである。それで、手紙をやつて、(一)時刻を嚴守すること、(二)教育に一層努力工夫すること、(三)口紅と白粉刷毛を學校に持つて來ないことを注意する。彼女は喜

んでそれに従ふ。

三週間後に、リヴァース氏は次のやうな招待状を手にする。

謹啓 貴下には最近御着任相成學校のために種々御心勞の段、一同深く感激致居候、此の第

一金曜日午後五時に停車場ホテルに於て、同僚相集り臨終命を催し、貴下を主賓に御招き

申上度、一同の懇望に御座候 謹言

首席 ジョン・ウキリング

新校長は食卓の主賓席につく。十三人の男女職員は食卓をとり圍む。彼は心から幸福さうに見える。首席のウキリング氏は、新校長に歓迎の辭を呈すべき動議を、次席のサースト氏に提出せしめたのは機宜に適した外交的手腕である。歓迎の辭は如何にも興趣に富んだ上出来なものである。特に興味を添えたのは、末席について居るジャック・グラウス君が、頻に「ヒヤ〜」と贅意を表すこと、いつもの無精に似ず、今日は小ザツバリした禮服をつけ、丁度子供がピ―アス石鹼で、今洗つて來ましたといふやうに、顔も髪も奇麗に手入れして、艶々させて來て

居ることである。校長は靜かに立つて御禮の言葉を述べる。

「御列席のウキリング君、サースト君並に同僚諸君に對し、謹んで御禮を申しあげます。今晚の催しは、今後私共が一致協力して教育のために盡す吉兆のやうに思はれて、心から喜び且つ感謝して居ます。私の氣狂ひのやうなやり方の中にも、一定の方針のあることを、何うにかこゝうにか諸君に認めて貰ふことが出來たやうな氣がして、うれしくてなりません。私は如何なる校長でも、同僚諸君の同情と協力に待たなくては、教育といふ仕事は、出来るものでないといふことを確信して居る一人であります。私が之れまでになし、又將來なさんとする事は、世の所謂成功とか名譽のためでないことを強く申し上げて置きます。私共は近世の産業主義が生んだ憐むべき貧兒——悪い境遇と遺傳のために、生存競争に不利な地位に置かれてある貧兒——のために、全力をあげて盡したいのであります。

私の今一つの目的は、教師の威信を回復し、地位の高上をはかることでありませぬ。私共は最近に俸給率の改正をかも知りましたが、更に社會の無知無慮者をして、吾々教師が過去現在に於て、社會文化のために盡した功績を是認せしめ、社會的生活に於て名譽の地位を與へさせぬ

ばなりませぬ。然るに私共同職は何うしたものか、社會人心の同情を得て居りませぬ。之れには固より社會の方にも罪がありませうが、教師の方にも全くないとは申されませぬ。私共は今少し偏見を去り偏聽を捨て、社會の批評を公平に聽き、無私に讀む雅量を持つことが大切であると思ひます。

世評に依ると、教師は一般に狭量で堅苦しい。男教師は老鴉のやうな服裝をなし、女教師はスマシ屋で、無愛想である。寄ると觸ると恩給や俸給の話で持ち切つて居る。いつも小さな狭い世界に閉ぢ籠つて、世の中を白眼冷視して居る。自分達同志で生き、同志で楽しみ、同志で死んでゆくといふやうに、如何にも反社會的である。廣く社會を見、種々の人士に接して、自分達の偏狭主角を矯正しようとはしない。知識階級の特殊部落である。デモ劇作者は教師を舞臺に於ける喜劇の材料に供し、三文文士は、骨なし人物の代表に用ひてゐる。之れを要するに吾等教師は、社會生活中に於ける或意味での馬鹿者扱ひを受けて居るのであります。

學校で習つた算術や手紙の御蔭で成功して居る實務家達も、吾々教師に對しては、餘り好感を持つて居りませぬ。大抵の人は、教師は文化の脅威者である。腰辦や羽織ゴロを養成する教

育をして居る。讀み書きソロバンさへロクに教へきらぬヤクザ者である。小學校を卒業しても猫や鼠といふ文字も正しく綴れず、手紙も満足に書けず、甚だしいのになると、二に二を足すと四になるといふことさへ出来ない卒業生もある。又吾々教師は子供に不平の福音を傳道して居る。勤勞を嫌ひ、小理窟を並べる社會主義者や共産黨の卵子をつくつて居る。レニン、トロツキー、マルクスの崇拜者を仕立て居る。今日頻繁に起る社會問題や何々爭議の種子を蒔いた者は、吾々教師であると言つて居ります。要するに教師といふ者は、知識の假面を冠つた大馬鹿者であるとは、實務家達の偽らない言であると思ひます。

宗教家達の言をきくと、吾々教師は無神と偶像崇拜の傳道者である。學校の繁榮は教會の衰頹である、今日の教育は無宗教家を養成し、此の世を拜金と肉慾の巷たらしめたと言つて居ります。要するに學校に於ける道徳は、甚だしく調子の低いもので、國民的偉大や永劫の生命の基礎である道徳的訓練は、不可能であると信ぜられてゐます。更に一步を進めて、今日の教師は力量以上の俸給を食つて居る。十中八九は門衛や巡査にもなれぬ貧弱者である。こんな先生方に同情して、彼是と世話をやくと、ツケあがつて却つてわるい。投げすてて置くに限ると毒

づいて居ります。

新聞を見ると、教師に関する記事は、任命と死亡と免職位のものであります。教育記事は漸次少くなり、活動やボンチや喜劇や貴族富豪の内所話の記事に壓倒せられて居ります。之れは一般民衆の教育的興味が減退した證據であると思ひます。

以上は吾々教育者に對して言はれて居る現状であります。私は之れ等をすべて肯定する者ではありませんが、さればといつて、全然否定するほどの大膽者でもありません。法學界や宗教界や實業界や操觚者に缺點があると同時に、吾等教育者にも缺點があることを認めるだけの雅量を持つて居るつもりであります。ただ吾等は最善の努力を盡して、之れ等の缺點を除去することに努むべきであります。口や筆ではなく、實績に依つてなすべきことは最も大切であると思ひます。吾等の仕事に對する正しい審判者は、神經質の成人よりも、寧ろ天真爛漫な生徒であります。吾等は純眞で陶冶性に富んだ少青年を預つてゐます。吾等の努力如何によつて、直接彼等の口から賞讃と非難のいづれをも受けるのであります。

吾等の目指すところは、教育に関する民衆の識見を高めることでもあります。小學校の教師又

は教育について批評する者は、大抵公共學校か大學の教師連であります。之れ等の學校は貴族富豪の子弟の學ぶところで、一般民衆の與り知らざるところであります。此のやうな學校の教師連の批評であるから、小學校に好意を持つた批評の少いのは當然であります。彼等は小學校は貧兒と鈍兒の集合所で、先生方の糊口の資を得る所であるから、設備などに餘分な金錢をかけるのは、御殿造りの塵埃溜を建てるやうなものである。それよりも天下の英才神童の學ぶ公共學校を完備した方が得策であるといふやうな、とんでもない大それた考へを世間に流布して居ります。實際就學兒童の九〇パーセントは、小學校に學んで居るのであります。小學校の兒童は公共學校の兒童に比べて、遺傳と境遇はわるく、發育不良兒や精神薄弱者が多いので之れが教育は遙かに骨が折れる。かゝる教育に従事する先生の地位も待遇も、公共學校のそれよりも良くすべきでこそあれ、悪くする道理は少しもないと思ひます。

最近の批評に、師範學校の生徒の素質は非常に低下して、家扶にも車掌にもなり得ないやうな者の集りであるといつて居ります。之れは勿論酷評であります。一部の事實は儘に當つて居るといはねばなりません。曾ては社會尊敬の中心であつた名譽ある教職は、斯くも無殘な狀

態に落ちた原因を索めれば色々あるでせうが、主として五十年間其の儘に据え置かれた待遇であつて、それに教育當局者の壓制と、頑迷固陋な視學と、民衆の教育輕視が手傳つた結果であると思ひます。之れは由々しき社會の一大問題として、今後攻究に價すべきものであるが、吾々教職に従事して居る者は、徒に人を當にせず自らの努力に依つて、失はれた名譽を回復するより外に良策はありません。即ち勤勞、劇しい勤勞、善良な勤勞と層倍の信念と希望と博愛とに依つてのみ回復し得るものと信じて居ります。』

新校長の熱烈な謝辭的講話は終了したので、拍手は満堂に鳴り響く。

*

*

*

*

首席の閉會の辭は、校長學についての意見ともいふべきもので、簡にして要を得た誠に振るつたものである。

『すべて校長といふ者は、校長にふさはしい學校を得る者である。學校が眠つて居れば校長も眠つて居る。學校が貧弱であれば校長も貧弱である。職員の同情と敬愛を得ない賢明な校長よ

りも、寧ろ少しお目出度い校長の方が遙に成績をあける。健實と自由を化合せしめることが校長として最も緊要な手腕である。教師と生徒に思ひ切つた自由を與へながら、古型の視學のやうに、疑の眼を見張つてゐてはならぬ。雜談と教育は互に提携して進むものである。此の意味に於て校長は常に校規の振肅に注意して居らねはならぬ。教師達のお茶飲話や、ストーヴ會議を等閑視してはならぬ。相當に教育のある教師でありながら、兎もすると心身の氣が弛みがちになるものである。良き仕事も與へず、賢き指導もせず、氣樂にして置くと、小人閑居して不善をなすの類で、空っぽな頭になつたり、手足が硬直して頭のいふことを聽かなかつたり、正業よりも副業に熱心になつたりする傾きのあることを忘れてはならぬ。

最後に一言すべきは、私は澤山な汗を出すことは嫌ひである。乍併、意義のある汗には反對する者では決してない。新校長は自分の仕事も倍にせられたが、私共の仕事も倍に上つた。吾々同僚は倍の仕事に對しては、何等の不平を持つて居らぬ。何となれば、新校長は人間である。熱烈な教育家である。寛厚な紳士であると信ずるからである。』

六 改革と危禍

大抵の教師は、餘り統計を當にしないものであるが、リヴァース氏は大の統計信者である。彼は學校をあづかるやうになつたので、校醫に各兒童の身體検査の成績の有無をきいて見たが何も持つて居らぬといふことである。それで彼は、自ら入學當初から卒業まで、三ヶ月毎に各兒童の身體検査をなし、精密な統計をとることにする。統計に依ると、貧民學校の兒童は、公共學校(貴族富豪の子弟)の兒童に比べて、身長も胸圍も二吋短かく、體重は軽く、皮膚病は多く殆んど結核にかゝつて居り、精力は弱く、フットボール競技のやうな烈しいゲームに堪へ得る者が少いことがわかる。

校長は強制營養の必要を感じ、之れを實施して多大の効果をあげる。肝油と乳劑を薄弱兒に與へようとしたら、殆んどすべての兒童に與へばならぬことを發見する。限られた公費では逆もなし得ることでないが、教育委員會は此の上に經費を増加してくれる見込みもない。そこで彼は慈善團に懇請して、助けを求めることにする。少からぬ寄附金を得たので、各教室に大き

な乳劑を備へ、各兒童に一日三四匙あて與へることにする。其の結果は直に跳躍や幅飛にあらはれ、今までは嫌つて避けてゐたフットボールやクリケットや舞踊のやうな活動的遊戯に、熱心と興味を持ち、自ら進んでやるやうになつてくる。獨り運動のみでなく、教室は活気に満ち、學習能率は増進し、行爲は正善となり、從來あり勝な残忍、亂暴、弱者窘め、コソ盗みは漸次減少する。

校長は更に改革の歩を進めて、學校自治を實施することに努める。各級に三名の委員を設けて、其の級の自治の世話に當らせる。二名は級友の互選で、一名は校長の推薦にして委員長の職務をとらせる。自治發會式後は教室にある鞭棒を集めて燃やして祝ひ火にする。各教室には次の掲示が出る。

！ 意 注

遅刻、怠惰、不従順をしたときは其の日は歸宅せしめ、校内の掲示板に姓名を張り出すことに定まる。

此のやうに信を生徒の腹中に置いたが、翌日二十名以上の生徒は、遅刻又は不従順をしたので、校長はギクリとする。此の騒ぎの日に、出席監督官が状況視察に来る。そして校長の試みを知つて、

「リヴァース君、之れは全然失敗である。何とか考へ直し給へ」。

「さうかも知れませぬが、暫く日をかして結果を見届けさせて下さい」。

「あんなやり方で、生徒を信用すべきではない。生徒は學校で窮屈な思ひをして學習するより

も、校外に於て自由に遊びたいのが、彼等の自然であるから、君のやり方は間違つて居る」。

「今週の未まで待つて下さい。それまでに此の方法の續否を決定します」。

「廢棄するやうになることは間違ないと思ふ」。

「何うか暫く見て見て下さい」。

「よろしい、見てゐませう。私は其の間は何も言はないが、此の方法を一般原則として他の學校に導き入れる事には反對するつもりです。すべての校長は君のやうな人格と手腕を持つて居るものではないから、君はリヴァース君で、他の者は君でないことを承知してゐてくれ給へ」。

「此の方法は別に大したものではありませんね。普通誰でも言つて居ることを實施したに過ぎないのであります」。

「それはさうかも知れないが、強制か監督がなくて出席をよくすることは、普通の者には出来難いことです。兎に角私は結果を見て居りませう」。

翌朝、二十人の不心得者は、自治委員會の手に渡される。満場一致で、次の如く決定し、實行する。

(一)之れ等の者は、學校の名譽を傷けたから、級友は、平手で彼等の尻を一つあて、父母教師がなすよりも強く打つこと。

(二)彼等の姓名と制裁の仕方を校内掲示板に掲示すること。
自治は正しく行はれるので、遅刻缺席は従来よりも非常に減退する。

次に企てたのは、頭髮虱の驅除である。虱の問題は、今に始まつたものでなく、随分前から問題であるが、之れが解決には種々な煩しい事柄が伴ひ易いので、誰も容易に手を下さなかつたのである。手を下しても途中で挫折する者が多い。現在のところでは、清潔兒は却て不潔兒のため虱の傳染てふ刑罰に處せられて居る有様である。法令では、斯のやうな奇現象を正し得る權能を當局に附與してあるが、之れが行使の實際問題になると、先にも述べたやうに頗る困難である。學校で子供の虱をスツカリ取り除いてやつても、彼等の寢床は萬年床で虱の巢窟であるから、翌日は又元通りに虱をつけて來るので、こんな問題は家庭の協力がなければ、學校

の努力も殆んど徒勞になることが多い。そして甚しい不衛生の親程、學校の強制衛生に反感を持つて居ることが大である。ヂムミー・ウオントは最も虱の多い子供であるので、學校衛生官からも兩親に度々注意したが一向聽き容れてくれない。それに厄介なのは父親の態度である。彼は自分の權利は極力主張し、他人よりの干渉は飽くまで排斥しながら、他人の權利はなるべく廢棄せしめようと努力して居る、利己的社會主義者である。女教師は、彼を毛蟲のやうに嫌ひ、狼のやうに恐れて居る。男教師は生徒の面前で、弱味を見せては、自分の威信に關はるためか、事面倒になると、教師の常套手段を用ひ、一時の氣休めを言ひ、隱便にすべらして片つけるのが常である。

或日、校長は、「おい、ヂムミー、頭髮をきれいに洗つて貰ふことは好きか」
「ハイ、大好きです、先生。」

「さうであらうと思ふ。それでは門衛へ行きなさい、よくしてくれませう」門衛は、ヂムミーの頭髮を最新流行の兵隊刈に刈つて、石鹼で綺麗に洗つてやる。すんだあとで、頭髮を掃き集めて見ると、虱がウヨ／＼として居る。

「どうです、どんな氣持がしますか」の校長の問ひに、

「スッキリします、先生」と、快活に答へる。

家に歸へると、父親が之れを見つけて眞赤に怒る。「アノ、社會の寄生蟲奴が、己れの子に、勝手な眞似をしあがる。チト、凝らしめてやらないと目がさめぬワイ」と、ブツ／＼と獨言して居る。

翌朝、ヂムミーの父は門衛に怒鳴りこむ、

「貴様が、己れとこの我鬼の髪をつんだのは」。

「あアさうだ、さうせよとのことだから」。

「貴様が、一體一體そんなことをする權能を持つて居るのかい」。

「君と彼は言ひ争ふのは御免を蒙る。校長の命でしたのだから、文句があるなら校長のところへ行つてくれ給へ」。

「いくとも、いかずに何うするもんかい」。彼は校長室に飛び込んで、惡罵のありつたけを浴びせかける。校長は黙して一言もいはぬ。やがて靜に自席から立ちあがり、卓子を壁際に引き寄せ、

せ、椅子も其の通りにした。此の間、雷のやうに叫びつづけてゐたウオントは、

「お前達教員共にチト見せしめてやらねヤ」とたけり狂つて居る。

リヴァース氏は、なほも黙して答へない。無意識にズボン釣を弛めて革帶を締め直し、上衣や胸衣を抜きすてるやうにして居る。

「何に、取組むつもりかい、つもりなら何時でも來い。お相手にや不足させないぞ」と、吼えて居る。

校長の沈黙と冷靜な態度は、更に彼を怒り狂はせる。校長は靜に立つて電話機に近寄り、受話機を手にとり、門衛に擔荷を持つてくるやうに要求する。それからクルリと向き直り、決心の色を浮べて、「來給へ、サア來給へ」と、力強い調子で言ふ。鼻息の荒かつたウオントは、顔色を換へ、兎のやうに逃げて行く。戦場で鍛へてきたリヴァース氏は、彼の弱點を看破る眼と腕を持つてゐるのである。

母親は父親のやうに手輕に片づけることが出來ない。彼等は口きたなく、いつまでも／＼罵つて居るので仕末に終えぬ。或日、クキーン嬢はアンニーが餘りに不潔な上に、ハンケチを持

つて來なかつたので叱りつける。それをきいた母は、嚇つと怒り、肩掛を引つ冠つて、不潔な頭と頸と兩手をかくして學校に飛んで來て、口八登しく辯じ立てる。或時などは教師に噛みついたこともある亂暴女で、クキーン嬢も助手も、彼女が學校に這入つてくるのを見ると、ギョツとするほどである。又或母は、教師が自分の子供の髪に害虫が居ると言つたのが癢にさわるといつて、馬鈴薯について居る甲蟲を手にして、學校にアバレ込み、其の教師を捜しまわつてゐる。

高い理想を持つて居る教師は、俗耳俗眼に阿らないから、低級な父母に誤解せられるのに何の不思議はない。リヴァース氏は理想に忠實な男であるから、妥協して事を有邪無邪に弄ることを知らない正直者である。彼は教育熱狂者である。生徒の風を退治するにも、父母の承諾協力に待てば良いこと位は知つて居るが、それは殆んど不可能であることを悟つたので、彼は衛生官に相談して、必要な手段を取り得る権能の委任を受けついで置く。両親に注意しても聴き

容れられないときは、學校衛生上の必要手段として、ドシ／＼門衛に散髪洗頭せしめることにする。メリー・サッドの頭髮はボサ／＼にもつれ絡まり、虱の巢になつてゐるので、能く洗ひ短く刈り、見事に縮らせ、クキーン嬢は美しいリボンをつけて家にかへす。貧民は子弟に衣食を給せられることには何の反對もせぬが、清潔にしてやると立腹するのが普通である。生れながらの無精な習慣は、清潔を嫌ふやうになつたものと見える。無智で固まつた頑迷は手のつけやうもないもので、教育の改良を妨げる最も厭ふべき障害物である。教育改良家は、寛厚な度量と、熱烈な信念と常住の愛を以て之れ等の障害物に面接せねばならぬ。

リヴァース氏は、夕刊を手にして、自分は一部の父母達に嫌はれて居ることを知る。新聞には『プロシヤ式の校長』といふ標題の下に、メリー・サッドの頭髮に關して、校長攻撃の手續が幾度も掲載してある。利己的社會主義者のウォントが攻撃の後立者である。攻撃の趣旨は要するに社會に悪評を宣傳するのが目的で、今までになされた改良や美點については一言半句も述べず、ただ單に校長は専横であり、残酷であり、軍隊式であり、教師といふ教師は官僚式のモデルである。よくもこんな時代錯誤の者共を集めたものであると、口を極めて悪評したものの

に過ぎない。思慮ある人達は、齒牙にもかけないが、過激社会主義者達は躍氣になつて攻撃の火の手をあふるので、狭い地方の話題にのほるやうになる。

リヴァース氏は、事の真相を明かにすべく、特別委員会から出頭命令を手にしたのは、其の後間もないことである。會長は、今回の事件は大袈裟なタワ事であると信じてゐるので、なるべく有爲な校長の感情を害せぬやうにと、會の進行をはかることに注意を拂つてゐる。賢明な労働黨員や其の他の委員達は、勿論紳士的態度を以て質問し、校長の答辯にそれ／＼満足の意味を表はしてゐる。ただ獨りマトリック・マックフラハーティ氏は鬢音卑調で、

「一體、彼は何うして人の子の大切な髪を切るのかい。彼は教員中の馬鹿者の一人であるのかい」と、言ひ切つて鼻を蠢かして居る。

「そんなお話振は餘りに民衆に媚びたものではありませんか」と、校長はきめつける。

「無禮なことを云ふない。僕等は君の飯櫃をとりあける力を持つて居ることを覚えてゐて貰はう。」

「左様なことは能く承知して居ます。苟も教育ある人士は、君のやうな無教育者の慈悲を乞ふ

やうな愚は斷じて致さぬつもりであります。」

「生意氣な！」と、マックフラハーティは叫ぶ。此の時會長はたまり兼ねて、

「謹しみなさい、脱線しないように」と、注意を喚起する。會長は言葉寧丁に、

「君は生徒の頭髪を刈る権能を持つて居られますか」と、尋ねる。

「法律に依つて持つてゐます。」

「併し、兩親の承諾を得なければ」と、マックフラハーティは賢さうに差出口する。

「兩親には何度も注意を與へました。私はこゝに學校衛生官の文書を持參してゐます。御覽下さい。」會長は受取つて一讀する。

「なるほど、シテ、君は生徒の髪に風が澤山居らねば刈る権能をお持ちにならぬのです。そして又それを證據立てることが出来ねばならぬのですか？」

「證據立てゝ見よ」と、例の男は吼える。

「私にハンケチを貸して下さい、證據を見せてあげます。」

校長は内カクシに手を入れて、硝子壺を取り出す。壺を倒して手早く栓を取り去り、一房の

生徒の頭髮を摘み出し、マックフラハートのハンケチの上に置く。「動いてるます」と、婦人委員は金切聲を出す。ハンケチの所有者は、飛び退いて、「焼きすてなさい、早く〜と、催促する。校長はハンケチを丸めて火中に投げ込む。やがて火は燃え移り、パチン〜パチパチと音を立てる。」

七 視學のさまざま

メリー・サツドの事件があつてから、學校と家庭の間にある誤解を除去することは、教育上頗る大切であると痛感する。父母に學校を理解せしめるには、先づ學校に來させる工夫をせねばならぬ。此のために校長及び職員は、兒童劇や音樂會を開いて、月に二度父母を學校に招待する事を企てる。今度の兒童劇のプログラムは、ピーター・パン、リッツル・ボビー、ベンザンスの海賊、ハンデイ・アンデイである。子供はすべて劇的本能を多分に持つて居る。彼等は喜んで海賊や赤い印度人などに扮する。兒童劇は公共學校では別に珍しいものでないが、貧民區の小學校では殆んど空前の出來事である。子供等は驚嘆の眼をみはつて、先生方の考案になる海賊の帽子や、天使の翼や、黒奴の假面をみつめて居る。彼等の練習振は随分實の入つたものである。錫の劍を佩き、印度人の弓矢を携へ、お山の大将己れ一人といはんばかりに威張り、勇敢に戦ひ、刀折れ矢盡きて、男らしく打ち倒れるあたりは、子供ながらも眞に迫つて居る。

或日の午後三時半は、兒童劇練習の眞最中である。其の時牛津^{オックスフォード}から一人の紳士がやつて来る。丈の高い、眼の鋭い、カーゾン鼻した、如何にも勿體振つた態度をして居る。兎に角、馬鹿でないことだけは慥かである。随分いかめしい肩書を持つて居り、坐作進退言葉遣ひから察するに、古臭い古典で固めた頭腦の持主らしい。紳士は視學のホレーショ・ヒツプス・フィツプス氏である。視學が到着したとき、校長は校舎を見まわつてゐて自室にゐない。視學は自ら校長を捜しに出かける。教室を覗き見すると、生徒は読み書きソロバンを投げすて、海賊の芝居の眞似をして居り、教師は教科書をそちのけにして、熱心に脚本を研究して居る。規則で固まつたヒツプス・フィツプス氏は、之れを見てビツクリ仰天し、之れは學校ぢやない、惡魔の巢窟ぢや、今は午後三時半であるから、慥かに規則違反である。

「どうもひどい亂痴戯騒ぎだね」とは、校長にあつたときの言葉である。

「劇を練習して居るところです」と答へ、彼を應接室に案内し、椅子を勧める。視學は、困つたものだ！ といふやうな顔つきをしながら腰かけて、時間割を持つてくるやうに請求する。

「時間割には、劇をするやうにはありませんか」と、冷かに注意する。

「さうであります。時間割や法令にないことも時々やります」。

「私はそのやうに聞いて居た。君は裝飾に抜け目がないやうだね」。

「裝飾とは、教育といふ意味でありますか」と、無愛相に問ふ。

「いや、君は新式の自由教育をして居られるが、こんな宿無兒に演劇をやらせるなんて、滑稽ではありませんか。君は生徒に甘い夢をみさせて居るのだ。やがて夢がさめて苦い現實に失望することです。こんな浮浪兒から、天才や秀才は決して出るものではない。それでも君は……」と言つて、牛津風に氣取つて、兩眼を瞬いてチラツと見る。

「私は批評特に反對の批評を喜んで聴く者です。どうか腹藏なく批評して下さい。シテ、あなたは如何様に教育したらよいとお考へですか」と、校長は椅子に腰かけつゝ聴く。

「ビシ／＼鍛練するに限ると、鋭く言ひ放つ」。

「ハア、ビシ／＼」。

「今時の教育は、病的感傷教育といふヤツだから、たまつたものでない。働かせるに限る。キツク働かせるに限る。彼等は結局樵夫や水汲女になるべく運命づけられて居るのだから。君は

樵夫や水汲女を生煮の團十郎にしようと企てゝ居るのだ。其の結果は蕩兒か淫女か不平者か革命家かになる位のものである。未來の日傭人足に藝術なんて猫に小判でせう。アハハ、小學校(貧民の子弟の學ぶ所)は小學校らしく教育した方がよい。』

『それでは教育の目的は、結局どうすればよろしいのでせうか。』

『各人を各人の身分に應じて教育するのです。日傭人足は日傭人足一本調子で教育すれば、間違もなく又能率もあがるのです。それを彼も必要此れも大切と、いろんなものを混合した雜種教育をするから、ログでもなしになるのです。犬にしてもさうです、第一雜種は大したことないが、第二第三雜種になればなるほど、どつちともつかぬ特徴のないものになつて仕舞ふ。』

『あなたは夢の甘さと尊さの教育を御知りになりませんか。』

『夢とは?』幻のことかね。幻の教育!! だめく、全くだめ、それは兩人の囁語に過ぎない。貧民は、教育でも何でも一切のものは、口腹の慾を満たす方便と考へて居るのです。米櫃を質に置いてもビールを飲む手合なのです。……ビールなんて、あんなものを飲む氣が知れない。私はウキスキー黨ですがね、君はどうです、エー』と、例の牛津風の勿體振つた瞬きをする。

『私は水の方が結構です。』

『水と感傷は双生児です。禁酒者は、英雄豪傑偉人傑士の住む國土に於ける悪魔です。禁酒者と無信國教者は夫婦です。恐るべき破壊主義者は、此の夫婦から生れた棄兒です。善良な赤葡萄酒と共立學校の教育は、寛嚴兼備の養見を培つてくれる両親です。……人は規律を守らなくなると、革命やボルシェヴィズムが起るのです。私は先生方の半分位は、トロツキーやカール・マルクスの心酔者でないかと疑つて居る。』

『スルト、之れが救済策に對する御意見は。』

『教權! 教權!! それに服従せしめるに限る。吾々は血と劍で帝國を建設したのです。生徒をして國旗に最敬禮をなさしめよ。キツブリングの愛國詩を詰め込めよといひたい。』

『彼等を教育するには、頭を満たす前に、先づ腹を満たす必要があると思ひますが。』

『腹の問題は、父母のなすべきことです。ロハで食はずと、働かずに食へるものと思つて益々怠ける。若し両親が食はさないなら、法律に依つて牢屋へブチ込めば世話はない。彼等の半数は働かずに、怠けてばかり居るからいけない。』

「働かうにも仕事が無ければ、致し方ないでせう」
 「本當に働く氣なら、仕事は見つからんといふことは決してない。仕事がないといふのは、働く氣のない者どもの口實です。社會主義者の中には、法律で備ふやうにせよと云ふ者があるが、そんなことは出来るものでない。社會主義者なんといふヤクザ者は、紅海カサハラ沙漠に乗て、仕舞へばよいのだ。六時間労働なんて、朝寝をする工夫に過ぎない。婦人の選舉權なんて俱樂部や院内でチャラつくためのものだ。信仰の厚い几帳面な清教徒を北米に逃がしてから、母國は日に／＼墮落していくので、慨嘆に堪へない」。

「あなたは、此の學校と吾々の教育の仕方をお嫌ひなのでせう」。

「全くそんな譯でもないがね、私は君の精力絶倫と突進的勇氣に感心して居る者です。けれども感傷と親切過ぎた人道主義は、失敗の本だと思つて居る。勿論間違つて居るかも知れないから、私のいふことをひどく氣にかけずにおいて呉れ給へ。今日は監督官として話して、居るのではなくて、友人として話して居るのだから」と、だん／＼寛嚴兼備の紳士となる。

「あなたは中々愉快な方ですな。そして露西亞の皇帝のやうな固い／＼保守專制黨ですな。私

は私と正反對な意見をきいて、非常に面白く感じました。併し、私は牛津で學ばずに、エジンバラで學んだことを喜び且つ感謝してゐます。遠慮なしに申しますが、あなたは小學校の先生をなされたことがありますか」。

「どうして／＼、そんなものになるのですか」と、先生といふ職業は、恐ろしい貧弱なもので、考へるさへゾツとするやうな表情をする。

「それで能くわかりました。失禮な言ひ方がありますが、あなたは本當に小學校の眞味を知つて居られないのです。視學は、一度は小學校教員の經驗を積まなくては、小學校のことは逆も分りませんな」。

「馬鹿いつちやいかぬ」。

「それはそれとして、御目にかけるものがありますから、御案内致しませう」。

「喜んで参りませう。見るのが私の役目ですから。それにしても復命書といふ厄介なヤツがなければ……」。

「之れは、精神薄弱兒の教室です。御覧下さい、彼等は國旗の尊嚴を知り、キツプリングの愛

國詩を解し得ると御考へになりますか』

『やらすれば出来ないこともあるまい』

『からしき駄目です。彼等の喜ぶものは、暖い氣持のよい室と、親切な女教師と、一日に三度の肝油と、熱いスープと、甘いお菓子と、それから不潔な巢に歸つていく時、「明朝又いらつしやい」と、親切に肩をたいてやることです』

『君は中々何うして、説教坊主そちのけのやうに説きつけますね』

『現代の教師は、教師であると共に、父であり、母であり、又醫者であり、看護婦であらねばならぬと思ひます。之れは獨り私ばかりでなく、同僚すべての考へであります。私共の此の努力に對して、神は必ず加護を垂れ給ふものと信じてゐます』

『それが其の、感傷的といふヤツで教育ではない。兎に角、結果を見てのことにしよう。』

『若し私共の教育の結果、より親切な、より忠實な、より優しい人物が出来て、世間見ずの僧院學校出のお役人様(暗に視學のやうな牛津の出身者をいふ)に對しても、親切を盡し得るやうになるかと思ひます』

『唯々、講釋は御免を蒙つて、論より證據、サア、教室を一寸覗いて見ようか』共に伴れ立ちて先づ幼稚部の教室に這入つて行く。子供達は、砂箱や泥土や木片や色文字を弄んで居る。校長は子供達に、

『皆さん、此處に來られましたお方は、學校を視まわられるお國のお役人様であります』と告げる。子供達は立ちあがつて、微笑みながら丁寧にお辭儀して、

『今日は、閣下』と、はつきりと述べる。

『今日は、皆さんお掛けなさい』と、ニコ／＼しながら答へ、非常な上機嫌である。それといふのは、閣下がいたくお氣に召したからである。

『なぜ、君はそんなに笑つてゐるのか』と、校長に尋ねる。

『私はあなたといふものを、今といふ今、よく分つたやうな氣がしましたから』

『それは、一體どういふことなのです』

『あなたは圓い人情よりも、四角な閣下をお好きと見える。世を外にした僧院學校出の官吏は、人情美を味つて居られぬらしい。人間は器械でありませぬ。あなたは、いくらヤキモキされて

も、人間を齒車仕掛のやうに、働かすことは出来ませぬ。あの小さい子供達でも、一日見ただけで、人柄を讀みます。あなたは、子供達が、閣下といふ言葉を特に強めて言つたのにお氣づきでしたか』。

『エー、マア、さう言はれてみると、何んだかそのやうでしたな』。

『子供達は、あなたが恐怖かつたのです。親しみを感じなかつたのです』。

『デモ、私は何とも言はなかつたのに』。

『それはさうでしたが、あなたが、教室に這入られたときの態度で感じたのです』。

『馬鹿言つちやいかぬ。あんな小さい者共が、マサカ』。

『小さくても馬鹿になりませぬ。それなら一つ試めしてご覧。五分間校庭に出てお遊びなさい。そしてあなたは、子供達の父親の氣におなりなさい。子供の遊び相手となつて、彼等の頭を撫でながら、戯談を言つてご覧なさい』。

『よし、やつて見よう』。牛津からの若人は、彼の最もやさしいところをあらはし、子供達と語り、話し、戯談を言ひ、フザけて遊んで居る。五分間とたぬうちに、子供達の心は解けて、

自分達の父や母や人形のことまでも、打ち明けて話すので、若人は、いつのまにか、子供達に釣り込まれてゐる。彼は子供達にわかるる時に、

『左様なら、皆さん』。

『左様なら、閣下』。彼の鋭敏な耳は、軟らかい親しみのある閣下の語調に氣づく。控室に歸つたとき、校長は、

『何うでした。私のいふことは間違つてゐましたか』。

『他のことは別として、今の件だけは君の方が正しいやうだ』。

『其の件です、教育上最も大切なのは、教育は親と愛です、権と威ではありませぬ』と、リヴアース氏は笑ひながら言ふ。

『さう!?……さうだね?』

『それで、あなたは、現代の教育に讓步せられたわけですか』。

『いや、何うして、私は君の探つて居る方針には、遺憾ながら賛成は出来かねるが、何となく君が好きでならないのだ』。

「私も、あなたに對しては、それと同一なのです」と、リヴァース氏は笑ふ。

「私はまたやつて來ます。今日は之れで失禮します」。

「お待ちしてゐますから、何うぞ近い中にお出で下さい」。

「左様なら」。

「左様なら」。

ヒツプ・フィツプ氏は、反民主的思想の持主であるが、わるい性質の人ではない。此の學校に敵意を持つて居らぬことだけは確かである。彼の視察報告書には、學校を非難した文句は一つもない。リヴァース氏は、實際彼の人柄を好いて居る。そして彼の幼い時に先入した貴族主義的思想も、何時かは溶けて穩健なものになるだらうと信じて居る。同じ視學でも、ウリア・ニツプ氏は、全く別人である。飾のやうな恰好の頭した、横柄な官僚式の仕方のない男である。或日、突然學校にやつて來たので、學校の空氣は忽ち變はる。女教師達は神經過敏になる

し、男教師達は反抗的態度をとるし、生徒達は無禮な言動に反感を懐いて居る。ニツプ氏は、各教室を巡つて、口答試験をする。其の問ひは、甚だしく時代後れなもので、聞いて居ると、腹立を通り越して笑ひたくなる。

「トリチノポリ(印度の南部の山間の小都邑)は何處に在るか。……トリチノポリ……トリチノポリ。誰も知らないのか。一人だつてイチエツ、木偶漢奴でくのまなぬ！ 何といふ馬鹿者だらう。こんなことさへ知らないのか」。生徒は擧手したので、

「よろしい、お前ッ」。

「ガリバルヂー(以太利の勇將)の大將であります」と、眞面目に答へたので、生徒はドット吹き出す。流石の視學も背ろ回いて、黑板の側にかけてある塵拂はたきをとつて口を塞いで居る。ニツプ氏は、口汚く叱りつけて、更に問ひを續ける。其の問ひはどれもこれもトリチノポリ式で、ロトルア(ニューズイランドの湖の名)や、ワンナズイ(ニューズイランドの河の名)は何處に在るかと言つたやうな種類である。一つとして正しい答を得ないので、怒り散らして教室を出て歸つてゆく。そして報告書の一節に、「普通一般の知識に缺けて居る。教育の方法は全然失敗で

ある云々。こうした視學によつて、幾多のよき學校、よき教師、よき生徒は、埋れ木となつて仕舞ふが知れない。神よ、願はくば、斯様な視學の苛責と辱かしめから逃れしめ給へと叫びたくなる。

*

*

*

*

愉快な親切なジョン・ラブ氏が、うれしさうな顔して學校に這入つて来る。ニツブ氏とは全く異つた明るい生々した空氣が校内に漲つて来る。彼は豊かな經驗を積み、度量で、仁愛に富んだ立派な紳士である。熱心な國文學の研究者で、キーツやウアーゾウアースやラムやバーンスの愛讀者で、勞働者に深い同情を持つて居る視學である。長い間、官僚的視學の壓制にびくついてゐた女教師達も、彼の罪のない輕口で直ぐ落ちついてくる。彼に教室を覗かれても、視察せられて居るといふやうな氣が少しもない。彼も亦、學校に来るのは、先生達の相談相手となり、援助者となり、協力者となるためと思つて居る。先生達も生徒達も、彼の姿を見つくと、親しい友、懐かしい親にあつたやうにニコ／＼して居る。教授に不慣れな若い先生を見

ると、親切に指導し丁寧に誘掖獎勵してくれるので、心から感謝し喜んで指導を受けない者はない。一日の視察が終つたので、リヴァース氏は、

「御疲れでしたせう。」

「否々、實に愉快でした。」

「有難う御座いました。」

「此の學校へ来るのは、私の楽しみの一つです。若しネー、其の……若し。」

「若し、何うなんですか。」

「若し他の學校もです、本校の教育のやうに、生き／＼してゐたら、視に行つても、どんなに張合があるか知れないがネー！」

「有難う御座います。全力をあげて益々努力致しませう。」

視學は校長の肩に手を載せて、

「君、私は、君のやうな教育熱心家を援助するのが、私の役目上の義務であると思つて居る。

貧民學校が喜びと笑ひに満ち、此の世ながらの天國であるのを見て、君の辛苦に感謝と敬慕を

表せずには居られない。君、萬難を排して勇進して呉れ給へ。及ばずながら、私は出来るだけの後援をするつもりです。

八 父母の學校理解の始め

校長は今度催す兒童劇の「リッツル・ボビー」や「ハンディ・アンディ」や「ベザンスの海賊」の評判が、區域の父母達の間に、一ぱいに廣がつて居るのを聞いて、私かに喜んで居る。生徒達は、案内文のある小さい入場券をつくつて配つて居る。父親は、ヂムミーやトムが舞臺に出るのを誇らしげに話して居る。母親は、メリーやアンニーの頭髮に結んでやるリボンを借るのに、忙しさに驅けまわつて居る。學校といふものは、長い間、税金のかゝる厄介千萬なもので、教師は血の氣のない人間の干物だと思はれてゐたが、此の先入觀念が搖ぎ始める。先生は思つて居たやうなひからびた方ではない。随分親切に子供の面倒を見てくれる。舞臺で着る美しい着物の世話もしてくれる。子供も喜んで學校にゆく。晩には學校で見聞した珍らしい話を言かせてくれる。學校から歸つても、今迄のやうに、老婆の家の窓櫺子に石を投げたり、

猫を追ひまわしたり、犬を窘めたりせぬ。友達寄り集まつて、兒童劇で演ずる自分達の役割を練習して、海賊が長刀を抜く眞似をしたり、小さなボビーが曲り柄の杖を打ち振つて歩く眞似をして、親達を喜ばせて遊んで居る。こんなことで、何時の間にか、親達は學校に好感を持つやうになつて來た。

愈々兒童劇の晩が來た。各室は電燈で眩しい程に明るい。「リッツル・ボビー」は一室で、「ハンディ・アンディ」は他室で演ぜられて居る。「ベザンスの海賊」は大廣間で舞臺にのほせるやうに準備してある。赤葡萄酒や色々な飲料を賣つて居る室もあり、拾錢で未來の吉凶を判断する占ひ者もきて居る。廣間には駄菓子や餡パンを賣つて居り、二階にはガラクタ物の大安賣をして居る。選りぬきの可愛らしい女生徒達は、小箱を持ちまわつて、兒童文庫の寄附金を貰ひ集めて居る。リヴァース氏は色々な催しに注意を拂ひながら、彼の教育計劃に對して、好感と援助を得ることに努めて居る。

招待したお客は、貧富貴賤とり／＼である。町長は船底形の帽を冠り、赤いジャケットを着て居る。町會議員達は、金鎖をビカつかせて居る。貴族や貴夫人達は盛裝して居る。リヴァース

氏の名聲は、遠近に響いて居るので、遙々出かけて来た者も可なりにある。兎に角スバラしい成功である。

親達にとつては、自分の子供が公衆の前、特に町長や町の有力者の面前で、演技するのを観るほど愉快なものはないらしい。こんな愉快さは、實際子供を持つてみれば、本當に分らぬものであるらしい。肩掛でポロかくしをして居る母親も、襟巻でカラーかくしをして居る父親も、幸福と満足の空気に浸つてウツトリとして居る。汗みどろになつて子供を指導して居る先生達を見て、今までは鼻垂小僧の親方とか、青瓢箪とか、空威張屋とか嘲つてゐたのが、すまなかつたといふ氣持になり、高い／＼とこぼしてゐた教育税も、安いものであると思はれるやうになる。老婆は、『先生も並大抵の辛苦ぢやないわい』と、涙を流して喜んで居る。

今晚の寄附金は、合計貳千五百五拾五圓貳拾五錢。

缺點をさがせば、持たない教師としては一人もないが、熱心に讀書し熱心に研究しない教師も

一人もない。之れ位に澤山な書物を購讀する學校は、他に珍らしい。それに、教師の身装が一變したことも容易に目につく。男教師は、サツパリとしてキチンと着こなして居る校長を眞似、女教師は、クキーン嬢の柄の上品な緩い上衣やシャツ、氣のきいた靴下や靴、能く梳つた髪を眞似て、教育ある婦人に似つかはしい態度と容姿になる。

ジョン・サーストは全く酒をやめて、學校中第一の賢い親切な教師となる。ジャック・グラウスは、『美しいブルムメル』を讀んだり、レニン、トロツキー、マルクスを宣傳するよりも、女教師はもつと楽しい美しい話相手であることを發見する。二箇月もたぬうちに、身装の立派な美しい教師は、公共學校(貴族富豪の子弟の學ぶ私立學校)にゆかなくても、タツフ街小學校でザラに見られるといふ評判は、町ぢうに傳はる。教師がキチンとした身装をして居るといふことは、特に小學校(主として貧民子弟の學ぶところ)に於て大切なことで、彼等は外部の美に打たれて内部の美に引き入れられるのが常であるから。

九 幼稚園の改革と教師の進歩

校長は相變らず想ひを教育の改革に潜め、根底ともなり基礎ともなる幼稚園の革新に手を觸れようとして居る。第一等級の學校になすには、何うしても幼稚園に適當な教師を得ねばならぬといふ結論に到着する。實際現在の幼稚園は旨くいつて居らぬ。幼稚園の主任であるアマリア嬢は、親切で忠實で勤勉で、同僚中最も敬服すべき一人であるが、幼稚園の教師としては、何う見ても適切な素質を備へて居らぬ。もとく彼女に適任の故を以て幼稚園の要位に据ゑられたのではなくて、上席教師の異動によつて、月並的に推しのほつたのである。彼女は幼稚園を立派なものにしようと思つて、大抵の者の眞似の出来ないほどに努力して居る。評判のある幼稚園は片つ端から見學して、尢大な研究録を書きためて居る。モンテツソリー嬢が來朝したときは、影の形に添ふが如くつき纏ふて、講演や指導を見聞して歩いたほどの熱心家である。彼女は幼稚園教師として成功しようとする人一倍の努力と苦心を重ねたものであるが、惜しい事は彼女は不適任である。幼稚園の教師は作られるよりも寧ろ生れるものである。幼稚園の教育

は學校中で一番困難なもので又重要なものである。教授や牧師達の中には反對意見の人もあるが、若し之れ等の人達に、一日だけ幼稚園の教育に當らしめたなら、コリ／＼して直に自説の間違つてゐることを發見するであらう。アマリア嬢は、熱心と勤勉の餘り自己反省の餘裕がないためか、自分の短所を知らずに居るのは、誠に氣毒なことである。それに女先生に多くあるやうに、指導的批評をすると、非常に神經質になるので、校長も少からず困惑して居る。校長は彼女は幼稚園の教師として不適任であると思つて居るが、其の他の點に於ては衷心から敬意を拂つて居る。彼女は實に十全の淑女ともいふべく、氣品のある態度、優しい動作、固い操守の持主であつて、又少年部の教師としては、比敵する者の少いほどな卓抜な技術を持つて居る。幼稚園から少年部に移せば、誠によいといふことも知つて居るが、俸給も低くなり、左遷の意味にもなるので、彼女の名譽にも關する。視學に話してよい轉任口を捜して貰つたり、當局に訴へて轉校させて貰ひ得ることも知つて居るが、之れは校長の性格のよくなし得るところではない。彼は全く途方に暮れて居る。

或日の朝、彼女は非常に晴々しい顔、輝いた眼をして登校する。見ると美しい婚約の指輪をはめて居る。校長は且つ喜び且つ悲む。喜んだのは學校のため、悲んだのは自分の爲めである。愈々結婚すれば、轉任か退職するであらうから、幼稚園に適任者を待て、かねての希望を達し、第一等級の學校たる基礎を固めることが出来る。悲んだわけは、校長は人間としての彼女に感心するの餘り、いつのまにか囚はれて居たのである。近き將來に於て出雲の神様の前に出るやうになれば、理想の妻と理想の幼稚部主任が得られるといふ、楽しい夢が破れたからである。首席のウキリングがお先に失敬したことがわかつたので、彼は良好の伴侶を得たウキリングの幸運を祝した。

『本當にお目出たいことです、君は天下の幸運兒です』と、校長は固く握手する。首席は顔を赤らめながら、

『有難う御座います』。

『君、暫く掛け給へ。少しお話したいこともあるから』。

『餘り六かしいお話でないやうに願ひます』。

『別に大した話でもないが、いつ結婚式を挙げられますか。實は幼稚部の後任のことも考へて見ねばならぬと思ひますから』。

『今のところ、家がありませんので困つてゐます。家さへ見つかりましたら、直ぐあげたいと思つてゐます』。

『なぜ地方のよい學校に行かないのですか。此の機會に校長になられた方が最もよいと思ひますが』。

『私は此處は居心地が非常によいので、他に行く考を持つてゐませぬ』。

『さう言つて下さるのは誠に有難い譯で、君ほどの手腕家は職員中にも少いから、君が居て下さるなら、私も大層力強い譯ですが、君の將來を考へて見ると、此の際思ひ切つて決心せられた方がよいと思ひます』。

『適當な學校があればさうしてもよいと思ひますが、實は私は餘り其方に知人を持ちませぬの

で困つてゐます。』

「ウキリング君、ステキによい地位が空いて居るのです。其區の教育委員長は私の友人です。私からいふてやれば、屹度成り立つと思つてゐますが、やつて見る氣はありませんか。』

「異存はありませぬ。此處を去るのは惜しくなりません、お蔭で旨く運びますれば、未來の妻もさぞ喜ぶことせう、有難う御座います。』

「君達はよい家庭をつくり、理想の學校を經營せられることゝ信じてゐます。』

間もなく、ウキリング夫妻はタツフ街小學校を去ることになつた。

* * *

頗る當惑してゐた幼稚園の問題も、思ひがけない機會が到來して解決してくれた。リヴァース氏は、之れを機として幼稚園を理想的に經營しようと思ひ、こゝ數週間には、半經二十五哩以内に在る有名な幼稚園について、熱心に調査し緻密に研究を遂げ、少からず有益な材料を得たが、彼は固より之れを其の儘模倣實施する愚をなさない。自分の學校は不幸な貧兒を收容

して居るので、すべての計劃を健康と衛生と道徳と喜悅の上に置かねばならぬと考へる。

リヴァース氏は幼稚園の主任は、クキーン嬢を以て他にないことを知つてゐる。同僚八人の女教師中、彼女は忍耐と想像と才能の三者を誰よりも十分に具備してゐる。併し困つたことには、クキーン嬢は當局に於ても新參未熟教員に屬するもので、古參年功教員中に入つて居らぬ。それで嬢を拔擢することは、教員進級の慣例（年功順による昇進法、良いこともあれば又悪いこともある習慣法）に依ると頗る面倒である。他の教師達は、幼稚園の主任は、固よりアマブル嬢の次位のネビテイ嬢であると信じて居る。ネビテイ嬢自身も、年功即ち働き手といつたやうな慣例に従つて、自分のものであると思つてゐる。それで嬢は、二・三の委員達を訪問して、それとなくほめかして先方の意見を確める。委員達の中で、穩便を義として居る人達は、異議のあらう筈はなく、嬢を推擧する口約束をした者もある。リヴァース氏は事面倒になつたと思つたけれども、彼は年功と適任を區別し、どんな困難があつても教育上の見地から適任を以て貫徹しようと思ひ決心してゐる。やがて當局から出頭するやうに手紙を受け取る。ともすると、ネビテイ嬢は成功するかも知れぬと思はれたので、彼は言葉穩かに詮衡委員會の席